大谷：本会は「AI時代における宗教」というテーマで討議をしていただくことでありますが、コルモスにふさわしい時代を先取りしたテーマではないかと思います。私には少し手に負えないようなテーマですが、皆様はきっとそれぞれの場でご関心がおありかと思います。後ほど、島薗会長から詳しい趣旨説明をいただけると思います。そちらをお聞きいただきたいと思います。今日はようこそご出席くださいました。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それでは、続きまして開催の趣旨説明を会長の島薗先生にお願いいたします。

島薗：皆さんこんにちは。コルモスの会長を大谷光真様から引き継ぎまして、やらせていただいております、島薗です。今年は第七一回のコルモス研究会議ということです。コルモスは、現代における宗教の役割研究会ということですが、コルモス、コルモスといっていると、現代における宗教の役割というのはなかなか出てこないのです。コルモスの七一回、七〇回を一区切りとしてこれまでの歴史をまとめ、課題をまとめるような書物も発行させていただきまして、新しい時代に入っていると思います。今回は、まさにそういう新しい時代の、実は宗教に非常に大きな影響がある事柄であり、あるいは人類文明のあり方に非常に大きな影響があり、これに宗教がどう立ち向かうかということが問われているAIについて取り上げております。「AI時代における宗教」という題です。

生成AIというのが、人間がやってきたことのうち頭を使う部分をかなり代行してくれるということで、大学の教員などをしておりますと、レポートが学生の考えたものなのか、AIにやってもらったものなのか、判断が難しいです。学生のレポートならいいけれども、研究者が生み出す業績も、どこまでが人間がやったものなのか、機械にやってもらったものなのかというのがわかりにくくなっています。将棋は、もうAIに勝てないようですけれども、

囲碁はどうでしたか。そういうふうになりますと、人間がやらなければならないことの値打ちはなんなのかということが、改めて問い直されることにもなりますし、そこまでAIに任せていいのだろうかという問題も、いろいろ出てまいります。大抵の仏教に関する質問は、AIが答えてくれるというのはブッダボットというようなもので、仏教研究の専門家がそれに取り組んでおります。そうすると、これまでは宗教的な集まりに出てこそ身に付くはずのものが、AIとやり取りをしていることで解決するということを考える人が少なくとも出てくるという時代です。今、私などはChatGPTというのを、まだほとんど使いませんが、Google翻訳は盛んに使っております。非常に効率がよくなりました。今まで、自分で必死に書いていた英文を機械に頼めばさっとやってくれるということで、こうなるとあらゆる職場や仕事場でAIに任せていくというドライブが、今どんどんかかっておりまして、そうなるとAIに期待をする。ますます人手が足りないです。私はたびたび能登の被災地に行っておりますが、なかなか復興しない。とにかく職人さんがいない、それから運転手がいないです。

こういうことで、仕事場でもできるだけ人手を使わないということで、実は今日も遅れた理由ではないのですが、今、駅で切符を買おうとすると非常に待たされます。要するに人手を使って客の相手をするというのをできるだけ減らしたい。そこはデジタルで済ませたいという、こういうことになってきております。例えば、高齢者のケアをする人手も足りないとなると、これはロボットに任せればいいということにもなってくるわけです。これは期待をかけている面もあり、それによって生活によい効果があると期待できる面もあります。

しかし、そこにどういう難問があるか。例えば戦争を人にやってもらうと、これは必ず命の犠牲が出る。それならばドローンをどんどん飛ばせて、標的はAIに計算してもらって、そしてここへ落とせばいい効果が出るということを機械が判断する。そうすると人を殺すという行為にも、どこに責任があるのかわからなくなる。こういうことをどこまで認めていいのかということが問われるかと思います。自動車の自動運転というのもどんどん進んでおりまして、車の安全がどう守られるかということでは大いに意義があることですが、これも責任が問われる場面では誰がどう責任をとることになるかという問題があるわけです。

こういうことをこれから議論していただくということで、明日のコルモスは、一日目は公開で多くの方と共に考えていくということで、二日目に会員の方を中心に宗教の現場でどういうことが問われているかを考えていくということですが、今日はこの領域に強い方々にお話をいただきながら共に考えていくという形で進めていきたいと思います。どうぞ皆さん積極的に討議にご参加いただき、その後には懇親会もありますので、どうぞ楽しんでいただきたいと思います。以上で趣旨説明ということに代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それでは講演会に移りたいと思います。講演会の司会を、同志社大学学長の小原先生にお願いをしております。それでは、小原先生にマイクをお渡しいたします。

小原：同志社大学の学長の小原克博です。本日は本学にお越しいただき、どうもありがとうございます。今日のシンポジウムは非常にチャレンジングなテーマですけれども、この時間の中でしっかりと深掘りしていただければと思いますので、よろしくお願いをいたします。これからのスケジュールを簡単に説明させていただきます。これから三名の方にご登壇をいただくのですが、才脇直樹先生・奈良女子大学教授、師茂樹先生・花園大学教授、このお二人にそれぞれご講演をいただきまして、お二人合わせて大体九〇分ぐらいを予定しております。そしてその後休憩を挟みまして、岡山大学准教授の石田友梨先生からコメントをいただき、そのコメントを皮切りに登壇者の間でパネルディスカッションをしながら、少し論点整理した上でフロアの皆様とも議論できればと思っております。本日の終了予定時間は一七時を考えておりますので、かなりたっぷり時間があります。したがって、ここに今日ご参加いただいた方々にも、今日のテーマに関していろいろなご意見賜りながら共通の認識を深め、そして特に社会全体にいろいろな意味でチャレンジングなテーマを提供している生成AIに対して、宗教の視点からどのような応答ができるのか。そういったことが本日のテーマになるのではないかと思っております。

早速ですけれども、才脇先生、師先生の順番でご講演いただきます。まず、才脇先生についてご紹介をさせていただきます。才脇直樹先生は、国立大学法人奈良国立大学機構奈良カレッジズ連携推進センター長及び奈良女子大学学長補佐、同大学研究員、工学系教授であります。それと並んで、大阪大学大学院基礎工学研究科石黒研究室の特任教授でもあります。大阪大学大学院基礎工学研究科助手、講師を経て、ロンドン大学の認知発達研究所及びスタンフォード大学電子音楽音響研究所ATR知能ロボティクス研究所客員研究員、甲南大学知能情報学部教授等を経て、現職となっておられます。共著といたしまして『感性情報学スマートテキスタイ

ルの開発と応用』ということで、この分野の専門家であると同時に神道を中心とする宗教界との接点についても、今日はお話いただけるのではないかということで、期待をしております。それでは、まず才脇先生、よろしくお願いをいたします。

才脇：ただ今ご紹介にあずかりました、才脇と申します。本日は諸先輩方、そして高名な先生方がたくさんいらっしゃる中で、私のような者にこうして講演させていただきましたことを深く御礼申し上げます。今、小原先生、それから島薗先生、また事務局の金澤さんにも本当にいろいろお世話になりまして、こういう機会を頂戴しましたことを、ありがとうございます。

今日は「AIとは何だろう」というテーマでお話をさせていただくのです。実は、少し簡単すぎるテーマ名ではないのかと思ったりするのですが、後ほどご紹介しますけれども、私の恩師がここのコルモスの席で講演させていただきましたタイトルをリスペクトして、こういうふうにさせていただいたわけです。私の所属などに関しましては今、ご紹介いただきましたので、割愛させていただきます。

私自身は先ほどもご紹介いただきましたように、大阪大学で人間情報学に関する研究などをしておりまして、今の所属であります奈良女子大でも様々な取組をしております。こちらのほうもいろいろ話できる部分はございますけれども、本日の趣旨ではありませんので、いろいろやっているのだなと。特に人間の感覚や自分の身の回りの人間自身の日々の暮らしを計測したり、分析したりするような研究しているのだなと、ご理解いただけたらと思います。

まず一人目の、私のコルモスにおける恩師の講義ということで、大村英昭先生です。大阪大学にいらっしゃいましたときに、大村先生に社会学を教えていただきました。非常にユニークな先生で話も面白かったのです。後々に大阪大学を退官されてから筑紫女学園の大学の学長になられたという話をうかがいまして、実は創設者であります水月さんのお孫さんが、今、立命館大学で客員教授。それから恐らくなのですが、女学園の理事の経営陣に加わっ

てらっしゃると思います。私も知人でして、すごく世間が狭いなと思ったりしております。それから、大村先生は浄土真宗本願寺派の僧侶でもいらっしゃいまして、実は私の伯母やそれから妻の母が興正寺派のお寺の人間といいますか、その世界でいうところの坊守という仕事をやらせていただいておりまして、そういう意味でいろいろなつながりがあるなという話を以前、大村先生とはさせていただいておりました。それで大村先生に今日も、本当はここでご一緒できればよかったのですけれども、もう数年前お亡くなりになったということで、ご冥福をお祈りしたいと思います。大村先生は筑紫女学園に行かれる前に、相愛大学にもいらっしゃいまして、実は相愛大学も、私はご縁があります。

今日はAIの話を広くさせていただこうと思うのですが、AIにもいろいろな分野があります。日本における音楽に関する情報処理と、それからAIの系譜というところで相愛学園と私、少しつながりがあります。今、ここにあがっておりますのは、近衛文麿首相のお写真です。日本における西洋音楽の祖といいますと、やはり近衛秀麿さんとおっしゃる方が西洋オーケストラの日本における祖といわれております。近衛さんが東京で音楽やっていらっしゃるときにご一緒されたのが、山田耕筰先生です。山田耕筰先生は、後ほど近衛さんと少し仲違いなさいまして、なかなか東京で音楽活動もしがたいというようなお話があったときに、それならいっそ関西に来て、関西で西洋音楽というのを広めていただくようなお仕事していただいたらどうでしょうという話になりました。そのときに山田先生の弟子で、相愛大学の音楽学部設立を一緒に手伝わせていただきました仲芳樹というのが、私の祖父のまた従兄弟になります。私は仲芳樹に、いろいろ音楽などをうかがったりしていたのですが、ちょうど仲の恩師になります、山田先生の同僚の東京芸大の先生に信時先生という方がおられて、海道東征など、そういう音楽で有名な方かと思います。その先生のお弟子さんで下総先生という方がおられますが、京大の学歌などを作曲なさったということで、非常に著名な活動をなさってらっしゃいます。その門下生に團伊玖磨先生や芥川也寸志先生、松本民之助先生という方がおられます。松本民之助先生は下総先生のあとで芸大の作曲科の教授を継がれているのですけれども、そのご子息の松本日之春先生という方が、この間まで京都芸大の音楽学部長をなさっていました。日之春先生は、実は私にとっては音楽の師匠でして、コンピューターを使って音楽をつくる、あるいはコンピューターを使って音楽を分析するということを日本で最初に取り組まれた方のお一人でした。そういうことで、実際にはあまり電子音楽を相愛大学でやっているわけではありませんでしたけれども、いろいろこうして周りにいる人たちの人間関係というのがつながっているなと感じました。

私の写真の横に少し女性がにっこりされていますけれども、その前にもう一人。坂本龍一さんは松本日之春先生の弟子でして、お父様の民之助先生のお弟子さんのお一人でした。亡くなるまで、二人でインスタやツイッターなどで近況を教え合って、お互い支

え合っておられたのですけれども、同じ年の同じ月にお亡くなりになりました。いろいろ縁の深い方々です。実は、私が奈良女子大で工学部を、日本の女子大ではじめてつくるというのを取り組みましたときに、このお二人に奈良女子大の工学部で、音楽に関する情報学を講義していただけませんかということをご依頼しまして、日之春先生は了解していただき、実際に講義もしていただきました。坂本さんは、奥様のほうからご丁寧なお断りのメールがありまして、本当は京都が大好きな坂本ですので奈良女子大などに行って授業をしたいと思うのですけれども、病気でどうしてもその任に堪えないと思いますといって、丁寧なお断りをいただきました。

ちなみに私の隣におります女性、近衛秀麿さんのご子息が春日大社の宮司家にご養子になられまして、奈良に縁が深いと申しますか、後醍醐天皇のお后だった阿野廉子さんのご子孫である阿野さんとご結婚なさって、おできになった水谷川優子さん。今、プロのミュージシャンとして、チェリストでチェロの演奏活動をなさっています。近衛さんと山田先生は仲違いなさったわけですけれども、関係者である我々は仲良くしましょうということで、嵐山の近衛さんの別邸があったところで演奏会をされたときに、こうしてご一緒させていただいたということです。

日本における音楽とAIの系譜というので、細かいことは申し上げると大変なので端折らせていただきます。実は人工知能学会というのが日本にありまして、この人工知能学会では初めて出た音楽に関する情報処理の論文というのを、私の先輩が書かせていただきました。『音楽における感性情報抽出の試み』というタイトルです。この先輩と一緒に、私はアメリカで開催されました国際会議で、おそらく日本人としては最初期の一人で、AIを用いた音楽の作曲技術といった発表もさせていただきました。

大学の話が出ましたので、もう一人、コルモスに関係のある私の恩師についてもご紹介したいと思います。第二四回に講演させていただきました、須田信英先生です。このときのタイトルが「コンピューター時代と宗教」と、今日のタイトルが「AIと宗教」ということですので、まさに相似形だなと思います。そのとき須田先生は「コンピューターとはなんだろう」というタイトルで講演されましたので、私は須田先生をリスペクトしまして、「AIとはなんだろう」というタイトルにさせていただいたという次第です。

私は、須田先生に制御工学というのを教えていただきました。東京大学で、例えば原子炉の制御、航空機の制御など、そういった大型のものの制御を研究され、阪大に来られたのです。実は、須田先生は上皇陛下のずっとご学友でいらっしゃいました。上皇陛下が即位されましたときに、ちょうど大阪大学の、私たちのいるビルにたくさんの報道陣が詰めかけてきたので、どういうことかなというふうにいっていましたら、上皇陛下、当時の天皇陛下から、つまりは宮内庁からだと思うのですけれども、ご学友としてのお祝いの言葉を取材するなら、この人にしてもらえというふうに依頼があったということで、みんな殺到されたということだったので

す。須田先生は非常に紳士な方でして、私も丁寧に制御学を教えていただいたのです。実は大阪大学のお膝元に麻田藩というのが、昔ありました。江戸時代の話です。麻田藩の藩主の末裔になる方がおられまして、この方は青木先生とおっしゃって、横浜国大の教授をされて退職されたのです。実は天皇陛下の弟宮様になられる常陸宮様のご学友で、ずっと親しくしていらっしゃいました。日頃電話がお互いかかってきたり、かけたりするというぐらい親しい方でした。これは、最近麻田でといいますか、大阪の豊中で関係者が集まったときの写真なのですが、真ん中が麻田藩主の末裔である青木先生です。常陸宮様のご学友。その先生の隣に座っている、向こうの偉そうに見えるおじさんが太田牛一という『信長公記』、信長の歴史を書いた本の作者の直系の末裔で、ついこないだまでこのおじさんのご自宅に信長公記の原本があったという方でいらっしゃいます。私は、その隣です。こちらは、NHKの大河などの歴史考証をやっていらっしゃる、小和田先生です。こんなメンバーで、いろいろお話をうかがったりすることもあります。麻田藩の青木家は黄檗宗でして、京都の宇治にあります黄檗宗のお寺、有名なところがありますが、あれは昔、麻田藩の青木家が奉行をしてつくったところだという話があったり、東京には初代の方の大きな五輪の塔ありますけれども、明治維新以降は神道に改宗されていますので、五輪の塔の前でしのび手を打つみたいな、非常にハイブリッドな感じの日頃の参拝方法になっております。青木先生も、惜しくもお亡くなりになってしまったのですけれども、そのときも菩提寺である黄檗宗のお寺で神職の方を呼んで、神道式でお葬式をするという形でした。

私がこういう話を直接、今日のAIの話には関係なさそうですけれども、なぜさせていただいたかといいますと、果たして今申し上げたような縁や歴史、あるいは宗教性といったようなもの、そういったものをコンピューターやAIというのは果たして必要とするのか、持つのかというようなことです。これは、たぶんもう電源切ったら全て終わってしまう。あるいは、コピーすれば継承といわずに継承されるような、世代を紡いでいくようなことを必要としないものには、そういったものは基本的にはないだろう。コピーをすればコピーは残っていくという意味では、世代をつなぐともいえますけれども、我々が考えるような意味での世代をつなぐということはないのではないかなと感じているわけです。したがって、私はこの方面の研究者ということで呼んではいただいておりますけれども、心の底ではAIって大したことないなというのが正直思っているところです。どうして私がAIをそんなに恐れないほうがいいかなと思っているかというところをお話させていただければなと感じるところです。

まず、恐らくなのですけれども、先ほどご紹介させていただいた須田信英先生などはコンピューターのお話をこの場、コルモスでなさったとき、偉いものが登場してきてこれからどうなるのだろうという観点でお話されたのだと思うのです。須田先生は本当に生粋の技術者として優れた方でしたので、コンピューターの発展

の歴史、これからどんなふうに技術が進化していくか、社会に対してどんな影響を与えていくかというようなことをお語りになったのだろうなということが、なんとなく感じられます。ところが、最近AIが非常に注目されるのは、須田先生がコンピューターを語られた頃と比べると、大きく異なってきている。インターネットをはじめとする情報共有の手段、個人が社会に対して情報を発信する手段などが発展したせいで、社会に対するインパクトが昔とは比べものにならないぐらい大きくなっている部分があるといったところの問題が大きいのかなと感じます。

例えばですが、フェイクニュースでウクライナの大統領が語っているという話だったのですけれども、実は中身は嘘だった、ロシアが都合良くつくった中身だったなど。トランプさんが逮捕されたという、実際にはそんなことなかったのですけれども、そういう映像をつくった。

あるいは、これは日本でもすごく議論になりましたので、ご承知の方がたくさんいらっしゃると思います。美空ひばりさんがNHKの紅白で歌うことになって、そこでAIで蘇ったなどという設定といいますか、つくりです。単にCGでバーチャルリアリティー、高精度なものをつくって、そこに音声を乗せているだけではあるのですけれども、その演出をあたかもそこに人格が存在するかのような形で出すことで、非常にいい意味でも、悪い意味でも社会に対して衝撃を与えたという事例かと思います。それから、そういう系統の話は枚挙にいとまがなくて、AIで写真集つくって売りました、三クリックでAIアイドルをつくれます、みたいなホームページがあったり。それから、あまりこういうところでお出しするような、高尚な話でなくて申し訳ないのですけれども、クラスメイトの偽ヌード写真をつくってバラまいた、それで学生が逮捕される、こんな事例も起こっている。

先ほど会長の先生よりお話がありましたように、「卒論をAIでつくられたら見抜けるのか、君」というお話です。それも本当に深刻な問題にはなっている部分もありまして、これは、AIによる自動卒論作成レポラブというホームページです。見てみますと、二万字の卒論を三万円で販売いたします、みたいなことが既に行われておりまして、これを従来は人間がやっていたわけですけれども、これをAIなどにやらせると原価があまりかからずにできるなど、そういったいろいろなトラブルがあります。そして、これも先ほどお話がありましたように、ドローンでそれが戦争に用いられるなど、こういった悲劇などもあります。

そういう意味で、社会に対する影響がどんどん深刻になってきて問題が大きくなってきたということで、二〇一九年に京都で行われましたG20の諸宗教フォーラムのときに、実は、私は神職でもあるのですが、神職の先輩であります三宅先生など関係者の方々に大変お世話になりまして、AIの脅威と人間の責任というセッションを任せていただき、いろいろ議論をさせていただきました。

ちなみにこの写真で写っております、赤い袍を着て馬に乗って

写っておりますのは、私でして、京都の嵐山の斎宮行列です。基本的には歴史再現行事ではありますが、川原で斎宮代さんに禊をしていただくというところは、本当の神事としておこなっているというものです。それのお手伝いをしておりました頃に撮影された一枚になります。ただ、これをやらせていただきました二〇一九年の段階では、まだ日常生活でAIの脅威を感じることはあまりなかったと思います。

このとき、三宅先生などを中心になっていただいて、各国政府への提言書というのをまとめていただきました。AIに関しては、例えば人命や人権という概念をAIも含めてサイバー空間でも適用しないといけないだろう。それからAIによる事故は、とりあえず事故として脅威ということであればAIを用いた犯罪、それから犯罪ではなくてもAIを人間が制御しきれなくなって、思わず引き起こされるトラブルに対処していかないといけないだろう、というような話。それからAIを犯罪として用いるケースについては、従来通り人間の心、精神、モラル、倫理といったもの、道徳性の向上などを考えないといけないだろうな、という話など。後者について、AIが人間制御しきれなくなるという話については、どんなふうな技術でそれをさらに抑制していくか、これを引き続き議論しないといけない、というような話をさせていただきました。技術的な将来を見通して政治家、宗教者、企業家などという関係者もそうなのですが、有識者も含めて文理融合型で対処法を考えていきましょうというのを提案していただいたと思います。

その結果だけではないと思うのですが、そういった提言書の延長線上に、例えば警察庁、文科省、国連ネット会議、広島AIプロセスというようなところで次々と、政治的な動きとしても、インターネット上でのAIというのをどういうふうに管理していけばいいかという取組が進められるようになりました。

アメリカでは、AIのリスク管理に関する大統領令が出た。ロンドンAI安全サミットというのがありました。つい最近ですと、この二月一〇日～一一日にAIアクションサミットというのがありまして、今ちょうど中国もAIに関する覇権争いに参加してきたみたいな状況になっていますので、そういったことを踏まえて信頼性の高いAIの技術というのを普及させるためにどうすればいいか、共同声明を採択するということをおこなったと思います。このように非常にAIというのがすごく社会に注目されるようになり、いかにも影響力の強いもののように見えてきているのですけれども、歴史的背景を見るとAIは必ずしもよかった時代ばかりではなくて、むしろ日陰の時代のほうが多かったかなという気がします。そういったところからAIの背景というのも皆様と情報を共有させていただければなと思います。

AIの発展史というのを見ますと、第一次AIブーム、第二次AIブーム、第三次AIブームと、過去三回ほどAIの研究が盛んになった時期がありました。最初は一九五〇年代ぐらいからはじまって、その次が一九八〇年代、それから今の二〇〇〇年代以降現在に続くというような感じなのです。この三つの波の間には極めて厳し

い冬の時代があって、AIの研究をしているということ自身が恥ずかしい、だから、私はAI研究者と呼ばないでください、私は知識工学をやっていますなど、そういうふうにいった時代があったぐらい落ち込んでいた頃もあったのです。したがって、私たちから見ますと、今のAIブームというのはかなりAIの研究者たち、あるいは関連する企業も含めて、戦略的に煽っている部分はあると思う部分も、正直あります。

特に近年AIが注目されてきたのは、一般の方にもわかりやすく脚光を浴びるようになったことが大きいかなと思いまして、一九九七年五月十一日にディープ・ブルーという、IBMの大型コンピューターがチェスの世界チャンピオンを破ったというあたりから、こうした比較的計算すれば答えが出てくるみたいなところで、人間の能力を凌駕するのだというのを戦略的に打ち出していく研究が、次々と出てまいりました。その一つが、先ほどにもお話があがっていました、この話かなと思います。二〇一六年三月にGoogleが開発したAlpha Goというのが韓国のトップ棋士、李先生を破った。解説はお通夜ムードになってしまった。「そんな、負けるはずがないや」という話だったのに、「えっ」ということになってしまったのです。韓国の棋院はAlpha Goに対しまして名誉九段を授与しております。これはアマチュアに対する段位ではなくて、プロとして認定したと。それから翌年には中国でも柯先生という、非常に強い先生を破ったようでして、こちらももう名誉九段を授けたということです。

これが第〇〇一号と書いてありますが、名誉九段 Alpha Go です。これはどうなのだという感じはいたしますけれども、一つのイベント的に見れば確かに大きなインパクトがあったなという感じです。Alpha Go は中国の柯さんを破ったときに、もうこれでやることは成し遂げたというので引退を発表しまして、その後は活動していない。勝ち逃げされてしまったという感じですけれども、逆に言えばそもそもがこういう計算、電卓と暗算でスピードを競うみたいな、それと同じようなことをやること自身に果たして意義があるのか。囲碁としては同じ人間同士の枠組みというところで、その人の知性同士を競い合うことにゲームとしての意義があるので、全く原理の違うものを二つ並べて、それでどっちが勝った負けたというのは、最初の取組としてはインパクトありますけれども、あまり続けても、だから Alpha Go のほうが人間より偉いのだという話にはならないからなというので、おそらく話題性もだんだん失っていったかなという気はいたします。

ただ、このときに Alpha Go が採用しましたディープラーニングという学習方法が、非常に優れた方法でして、従来の方法ですとあらゆる打つ手の可能性というのを繰り返し繰り返しシミュレーションしていかないといけないという、非常に効率の悪い方法だったのですけれども、Alpha Go のやり方というのは人間のトップの棋士がやるような打ち方です。これを具体的に学習していく。確率として「次、こういう手がくることは高い」というのを学ぶ。しかも、それを一回や二回でしたら、総当たりで学んでいるほうに負けてしまうのですけれども、普通ではできないぐらい何百万回も様々な対局を学習していくことで、どんどん理想的な打ち手というのを見つけていくという独特の学習方法です。ニューラルネットワークという方法です。ここではあまり詳しくご紹介する話ではないと思いますので、さらっとですけれども機械学習を用いて確率でここに打ったらいいなと。例えば、「あ」という文字を手書きで書いたときに「あ」である可能性九〇%、「お」である可能性八%だったら、これは「あ」といえばいいよねみたいな。それを碁の打ち方に関しても適応した。どの場所に打つと、どれぐらいの確率で勝ち筋が見えてくるのかみたいな話です。そういうふうな方法を適用したということです。

さらにディープラーニングといわれますのは、普通にニューラルネットワークと呼ばれている技術が三層ぐらいの簡単なシンプルな構造なのに対して、真ん中の中間段階の層というのをたくさん用意して学習できる精度を上げ、また多様性に対応できるようにしたといったところが新しい点でして、画像の認識、自動運転、音声認識など、様々なところで利用されております。

使い方としては、イメージはこんな感じです。猫の画像がたくさんありまして、これをコンピューターに見せる。画像として入力する。そうすると猫というのは一体どういう特徴を持ってるものなのかというのを、たくさんの画像の中からだんだん抽出して、それをニューラルネットワークの中に数値として貯めていくわけです。新たな画像をそこに見せたときに、例えば左側は犬だけれ

ども猫ではない、右側は猫ですみたいなことを、きちんと答えられるようになるという方法です。だから、賢い方法かというと必ずしもそうともいえなくて、事例をたくさん積み重ねて、たくさん学習させることに意義がある。しかし、だからこそ逆に学習していないものに対しては全く無力だ。あるいは学習した内容が間違っていた、偏っていたということであれば、偏った結果しか出しえないみたいなところがあります。

Alpha Go はどんどん進化していって、もう今では神になったのかというふうにいわれたりもしているわけです。しかし、本当のところはそこまではいっていないかなという感じはいたします。ただ現象として人間の棋士に対して、非常にインパクトのある勝利を収めて、そういったことをまたメディアに宣伝されていることは事実ですので、社会的にはかなり恐怖といいますか、脅威といいますか、そういった気持ちで見られているのだろうなという感じがいたします。

将棋でも同じようなことがありまして、二〇一七年に電王戦というところで佐藤九段と Ponanza という、AI の将棋ソフトの対戦がありました。このとき、Ponanza が二戦全勝して佐藤名人を破った。佐藤名人は、それでずいぶんと落ち込んだという話があるのです。このとき初手として Ponanza が打った手が「3八金」という、考えられない手だったというのが話題になります。これを将棋の盤面で見てみますと、「3八金」というのは、あそこの金色で示してあります、玉の横から斜め上にあがったところです。最初にあれを打つというのは少し考えられないなというのは、将棋をほとんどここにいらっしゃる方々はご経験いただいていると思いますので、「あり得んな」と思われると思うのです。大体、普通は角や飛車などの頭の筋などをついて、外へ攻撃に出られるようにするみたいなのが多いかと思うのですけれども、こんなことをされて動揺されて、佐藤さんは考えてしまったわけです。そこを AI につけこまれた。つけこんだわけではなくて、そこで人間が動揺したことによって読み筋を間違った。AI や機械というのは、最大の強みは感情がないわけですので、単純にもう計算して数値に応じてやっているだけですから、そういう人間が動揺したというようなことが全く逆に、機械のほうにはないということです。

四月一日にこれがありまして、この対戦があった二か月後に NHK スペシャルが報道されました。「人工知能―天使か悪魔か」というタイトルで、電王戦の第一局3八金の衝撃というのが、いろいろな観点から分析されていました。羽生さんなどは、こんなあり得ない手を最初に指されて、その結果、最初はそんなことあり得ないと思って、なんだこいつと思って対応しているところが、十手以上先のところで、実はそれが効いてきたみたいな、そういう用意周到な読みというので完敗することになった。

実は Ponanza を開発した山本さんという方は、五万局の対局をデータとして学習させて、さらに学習した Ponanza 同士で延々と自動対戦七〇〇万局を対戦させた。これを人間が学ぼうとすると二〇〇〇年ぐらい時間がかかるのに、機械同士ですから徹夜でも、

一日中でも、これればかりやっているということで、人工知能は劇的な進化を遂げたのだ。いずれこういうふうにくるとシンギュラリティーがきて、人間を超えられてしまうのではないかということもいわれています、みたいな話だったのです。しかし多くの研究者は、そういうことと人間自体の複雑な知能全体のこととは少し違うな、シンギュラリティーは来ないですよという方も少なからずおられます。

実は負け続けてきたAIの歴史というのがありまして、最初、第一期の頃に使われてきた開発、研究されたAIというのはこういう感じです。出口を自動的に探す技術みたいな、行き止まりを回避して最短距離で出口に行くにはどうすればいいでしょう、というのを学習というか、発見するような技術。それから先ほども申し上げました手書き文字を認識するような技術など、こういったものだったのです。ただし、そんなものしかできないのかといわれて、すぐに研究はぽしゃります。その程度のことだったら別にたいして知能というほどではないではないか、みたいな批判など。やっている研究者自身も、こんな研究ばかりやっていてもそんなたくさんの応用できる先ないしな、みたいなので、少し気持ちがデプレッションされてしまうというところがあるわけです。

その一方で、もう少し人間らしいふるまいをAIにさせるといいのではないか、みたいなことを考えた先生もいます。MITのジョセフ・ワイゼンバウムです。この方が、一九六五年頃にELIZAというプログラムを開発しました。このELIZAは対話するAIでして、例えばこんな感じなのです。「何か悩み事はありますか」、「人間が男の人はみな同じね」、「そのことについてどんなことを思っているのですか」と、いつも何かしらイライラさせられるのとずっと延々と対談しております。実はこれ、あらかじめプログラムされて、そこに入っている文章以外のものは出てまいりません。プログラムをされているものが全てでして、予想もしないことを人間が言った場合は、「ところで今日はいい天気ですね」など話題を変えてみたり、あるいは会話の文章の一部だけを取り出して、「あなたが落ち込んでいるとは残念です、なぜ落ち込んでいるのか話してもらえますか」など、そういうふうに相手にボールをうまく振る。そうすると延々と会話が続いているように見えるので、なんとなくそこに知性があるように感じられる。これを、ELIZA効果というふうにいうのです。普通健常な方は、しばらくやっていると対話している相手の知能の範囲、話題の中身が見えてきますので、「あっ、こいついろいろ対話してるけれども、実はたいしたこと知っていないな」というのはすぐわかるのです、見抜けるのです。これが効果あったのは、例えば精神疾患などで入院されている方、それでカウンセラーの方と話して、いろいろカウンセリングを受けていても、カウンセラーのほうも同じ話題を延々とされると、非常にカウンセラーのほうもつらくなってきたりする。あるいは、それは認知症などの高齢者の方などにも似たような傾向があると思うのですけれども、そういった方にこれを使ってもらうと、ELIZAさんだけは私を理解してくれる。ずっと私と会話し

てくれていると、私を見捨てていない。こういうふうにして救われるという話もあったりしたのです。ワイゼンバウム自身は、それに逆に非常に悩みまして、そんなんでいいのかと。これは中身ないのだよと。なのに、ここに人格なり、なんとなく人間性みたいなのを見つけ出して、私は救われるって、それはどうなのだといって、ワイゼンバウム自身が精神不安定になってしまった話も聞いたりもいたします。

そんなことも含めていろいろな取組がありまして、私のおりました大阪大学では当時、人工感性の研究というのをやっておりました。感性情報処理といいますけれども。そこに先ほどの日本ではじめて取り組んだ、音楽情報処理の話も少し出てまいります。NHKのビデオがありますので、これを少しご覧いただければと思います。

映像音声：今週は西日本各地の大学の研究室で、今どのような新しい研究が行われているのかを探る大学研究室最前線をシリーズでお伝えします。一回目の今朝は、コンピューターの分野で新たな取組をしている大阪大学基礎工学部の井口教授の研究室です。コンピューターといいますと理詰めで冷たいものと思われがちですが、井口教授の研究室では喜んだり悲しんだりする人間の感情を持ったコンピューターシステムを開発しています。コンピューターは、一体どこまで人間に近づけるのでしょうか。

才脇：これは四〇年前です。四〇年前にこれをNHKが放送していまして、自分の所属の研究室でこれをおこなっていました。実は最後に出てくる教授が私の恩師で、語るのですが、あくまでなぞり感性であって、コンピューターが人間の感性を理解しているとは思っておりません。そこに人間との間には大きな溝があると思っています、みたいなことを言っているのですけれども、僕らにしますと四〇年後の今でも、この状況から全く変わっていない。技術の基本的な取り組み方は同じようなもので、しかも四〇年前にぶち当たっていた人間と機械との間の壁というのは、今でも破られていない。だから、これを超えてはいないと思っています。少し、そういう前置きにてご覧ください。

番組始まったばかりで申し訳ありません。一番奥にいる、立っている眼鏡の先生が、私の恩師の井口先生なのです。手前に座っている、黒い服を着ている男の子が私です。四〇年前なのですけれども、実は何もこのときはやっているわけではなくて、ただ研究室に配属されたばかりのある日、突然「NHKが取材に来るから、みんなここに座れ」などと言われまして座っただけです。ただ、手前に座っております白い服の人。そして、さらにもう一人手前、顔だけ映っていますが、この二人は実際にこの研究をした人で、私の先輩です。白い服を着て真ん中に座っている人は、今、奈良先端科学技術大学院大学の副学長理事をやっている加藤博一先生。これはバーチャルリアリティーの技術の日本における父の一人などといわれています。それから手前に座っている片寄晴弘という人な

のですが、この人が日本ではじめて人工知能学会に音楽に関するAIの論文を書いた人で、今、関西学院大学で教授をやっています。

岸本：この研究室では様々な新しいシステムの研究が行われていますが、そのうちの一つがコンピューターにある音楽を聞かせて、一体それがどんな曲に感じるかというシステムなのです。今流れている曲、私は少しもの悲しいけれども、優しい感じの曲だなというふうに思うのですが、このコンピューターが聞いたら一体どんなふうに感じるでしょう。これは一体どんなシステムになっているのですか。

井口：あらかじめメロディーや和音の流れといったものをコンピューターに、人間ならばどう感じるかというふうな情報を教えこんでおきまして、これをデータベースと呼んでいますけれども。その中身と新たに聞かせた音楽との照らし合わせを行いながら、人間ならばどう感じるかということを文章として表現するといった仕組みになっています。

岸本：鑑賞文が出てきました。なんて言っていますか。

井口：この曲は、全体的な雰囲気はゆっくりとしていて、少し悲し気である。またスマートで少し真面目なシリアスな曲である。また部分的には、例えば希望に膨らむような雰囲気も含んでいるというような、そういった出力をしてきているようです。

岸本：大した鑑賞能力ですね。

才脇：時間のこともありますので、このあたりでこれは終わりにしたいと思います。こうした技術などの研究はどんどん進んでいたのですけれども、根本的に大きな問題がありました。今のは年代的にいいますと、ELIZAにしましても、私の恩師の研究室の音楽情報処理のAIに関しましても、第二次AIブーム一九八〇年代の仕事です。しかし、このとき何が問題になったかというと、人間が全てプログラムをしなければ動かなかったということなのです。だから人間があらかじめわかっていることを、しかもそれを人間ができるほどたくさん、多様なことを全部学習させようとすると、本当に膨大なプログラムをしないといけなかったので、そんなのとても耐えられなかったのです。今、限界が突破された一つの要因は、先ほど申し上げたディープラーニングというような手法を用いて、学習自体を自動化できる。もうそんなに人間が苦労しなくても、自分が発見した知識、自分がみつけた特徴などをいちいちコンピューターに教え込まなくても、どんどんどんどんデータさえ与えていけば、なんらかの答えを出してくれるようになると、そこが大きな違いかなといったところです。

さらに二〇二三年、藤井聡太七冠が永瀬さんと対戦されたときに、こんな不思議なことがありました。これはAIの限界を一つ示している、わかりやすい例かなと思います。実は一二二手目まで、藤井七冠の「5五銀」というところまでですと、「九九%、永瀬王座の勝ち」というふうにAIが判定していたのです。最近AIは、将棋の対局などのときに対局を読んで、どっちが優勢かというのを

示してくれるわけです。そこで藤井七冠は負けている、ほとんど勝ち筋ない。ところが、「5五銀」というのがあまりに悪手であったために、AI的にはこんなのあり得ないということだったのです。ところが、それが対戦相手の永瀬九段の動揺を誘うわけです。この手には何か裏があるに違いない。いや自分がわからない裏の裏があるに違いないなどと読んでいるうちに、つい「5三桂馬」というのを打ってしまった。これが圧倒的な駄目な数字で、一二三手目打った途端に、一気にAIの評価が逆転してしまったということです。したがって、人間の知能とAIには異なる側面がありまして、人間はこうして感情的な動揺を誘われたり、そしてあり得ないというようなことがあったときに、違う判断してしまったりということがあるのですけれども、AIはあくまで計算機ですのでそんなことはない。将棋やAI、ディープラーニングは確かに人間より高速に最善手を見つけることができるのですけれども、これは電卓と同じでして情報処理技術としては当たり前の成果なのです。ところが、学習したデータ以外にしては全く無知なので、心理的なことは全く考慮されていない。そうすると逆に心理的なモデルというのをどんどん学んでいけば、人間に近づけるのかということなのですけれども、今のこの手法はあくまで関数のようなものを学ぶというだけでして、入力データが入ったら出力データが自動的に決まるということですので、人間が学習しているときのような新しい概念を自分なりに獲得して、解釈を変更していくといったことは難しいわけです。

それは、大規模言語モデルオープンAIなどでも同じです。東京大学の松尾先生など、AIのムーブメントをけん引しておられますが、第四次ブームといっていいだろうというお話をされています。私が今一緒の研究室、阪大でやられている石黒先生が、バチカンでAIを応用したロボット、アンドロイドの技術について講演をされたのです。少し、そのビデオも一緒に併せて見ていただこうと思います。これは、そのときの様子です。大司教をはじめ、いろいろな方がたくさん集まっているところで石黒先生、講演されたわけです。そのときにお見せになったビデオの一つが、これです。

男性：面白い話できたらいいなって。

男性：面白い話か。それは、あまり期待しないほうがいい。僕の話は大体「人間とは何か、アンドロイドとは何か」という深淵な話になるからさ。しかし、それが面白いと思うならなんでも聞いてみな。

才脇：こんなふうにして対話しながら会話した。対話が進んでいくわけなのですが、このロボットはおそらく次回の大阪万博の目玉の一つになるだろうと思っています。

ただ、このロボットの会話というのは、あらかじめ石黒さんの本一〇冊ぐらいをディープラーニングさせておいて、その中身をまとめてしゃべっているに過ぎないのです。だから、それを超えるような話は当然ながらできないのです。最初に有機生命体ではないコンピューターAIというのは、縁や歴史、宗教性を持つのか、

必要とするのかという話をさせていただきました。石黒先生自身はそもそもが少し考え方が違っていまして、例えば身体的特徴や能力などは有機生命体であることに起因する、しかしそういった差別は除去できる。人間と機械が一体化していき、そして人間が無機物と同じような形になっていくことで完全な自由が獲得できるのだというのが、石黒先生の基本的な考え方なのです。それで、これをバチカンで語られたそうなのですけれども、「えっ、バチカンでそれ言うのですか」と僕は言ったのですが、そうしたら最後に、ある質問者の方から「石黒先生、あなたが地球人でないことはよくわかりました」と言われた、というふうに言っていまして、それはそうでしょう。先輩後輩なのでお手伝いはしているということではありますけれども、僕個人は理不尽な人生を生きつつ、理屈で解決できない悩みや苦しみを超克するというところに人間性、あるいは人間の人生のドラマや感情などが生まれてくるのではないのかなというような気がしていまして、そういう意味では、最初からあらゆる違いが全て除去されてしまう平板になった世界というのは、ある種の全体主義に近いかなみたいな、みんな同じだみたいな均質化された社会かなというような感じがしていまして、少しそこは石黒先生に「どうですかね」と言っているところです。

具体的にAIに不足しているものは何かと言いますと、例えばうちの学生さんがコシノジュンコ先生と一緒に、AIを創発パートナーとして新しいファッションデザインをするというプロジェクトやりたいですといって取り組もうとしていたのです。今、ミッドジャーニー。右側も左側も、両方ともある種のAIなのですが、こういうふうに彼女が示唆を与えるとAIが、こんなデザインはどうでしょうというのをたくさん返してくるのです。ところがどれを見てもコシノ先生にせよ、彼女の学生さんにせよ、自分の好みのデザインではない。そもそも、自分たちの好みを理解してくれていない。その理由はAIが学習しているデータが欧米のハリウッドなどの女優さんのデータ中心でして、例えば和風のデザイン、あるいはもっと違うデザインみたいなものを全く学んではいないのです。だから、そこが一番の落とし穴でして、今ネット上などで出回っているマジョリティーな情報以外は基本的に学んでいないので、新しいものをつくっていこうみたいな気持ちには対応できない。あるいは、新しいものはつくることができない。それから、そもそもが今のロボットは、人間が当たり前のことが全くできませんでして、例えば介護ロボットがあります。こういうのが報道などに出ますと、今にも介護ロボットが一人暮らしのご老人を助けてくれそうに見えますが、実はそうではなくて、これは背中と足に手を差込んで、ここまですればトイレやお風呂などに連れていくこともできるわけなのですけれども、そもそも寝たきりのおじいちゃん、おばあちゃんの背中に痛くないように優しく手をすりこむ、これが、ロボットはできないのです。単なる圧力センサーしか持っていませんので、ツーッといっておじいちゃん、おばあちゃんの体に当たって「痛」って言われて、はじめて少し下げようみたいな。しかし、人間は指先のテキスチャーの触り心地が時間的

に流れていく感覚や、圧力の変化をリアルタイムにずっと理解することができるのです。それも小さい頃からずっと学んで、適切な痛くない、優しい介護とは何かというのがわかっているので、痛くないようにすっと差し込めるわけです。そんなことすらできていないのです。そういったものすらネット上には情報にしてあげようが、まだないではないですか。人間の感性や感覚などです。だから、そんなものをネットの中の情報から学びようもないのです。そういうものは全く、今のAIは対応していないといってもいいかなということで、生成系AIにもいろいろな限界がありますという話などをテキストで書かせていただいていまして、こちらは資料で共有させていただいていると思いますので、またお読みいただけたらなと思います。

結論として、まだ現段階では人間の知能と同等ではないというふうなことを申し上げていまして、その一方で生成系AIなどを中心にして問題、リスクはたくさんある。学習したデータが不適切だった場合にヘイトスピーチや犯罪的な示唆をしてしまう。これは学んでいるデータが間違っているから、当然そうなるのです。処理自身は間違っていないのですけれども、学んでいるデータそのものが偏っている。だから平気で嘘ついたり、破綻した画像を提示したり、偽情報を拡散したりするし、ネット上からの著作権問題なども起こったりする。AI兵器の問題も出てきたりするということで、どちらかというとAI自体の道具としての脅威というよりも、それを使う側のリテラシーや倫理観の涵養、そしてそれをどう管理していくかという部分のテクニカルな話、こういったことが重要になるのかなと思います。

こないだ、僕は大阪の神社庁で神職の方の研修がありましたときに、ChatGPTを使うとどうなりますか、みたいな話を少しさせていただいたのです。ChatGPTは神道に使えるのかみたいな。もう時間ありませんので、あまり詳しくは申し上げないのですが、やはり使える部分と使えない部分があるのです。ネット上で明らかに誰もが共有する情報として間違っていないと思われるようなもの、例えば日本の行事など、こんなものを表にしろなどといったら簡単にしてくれます。ところが、例えばなのですけれど、バーチャル神社って可能ですかみたいなことを問いかけたりすると、途端に変なこと言ったりします。島根県の出雲大社のオンライン参拝があります。バーチャル参拝やおみくじをやっています、などというようなのが出てきてびっくりして、「そんなんやってるか」と思って出雲大社の本体のホームページを見に行きましたら、まだないのです。恐らくですけれど出雲大社などというようなキーワードでホームページをつくっている、怪しげなというか、趣味の方々などが、そこでバーチャル参拝をやってみたなどいろいろなことを書いていると、それを拾い集めて、間違った文章を構成してしまっているのです。したがって、これなども実はAIが脅威なのではなくて、ネット上に公開されている情報が不適切なものがたくさんある。そういったノイズを排除しなければいけないのですけれども、それができないというところに問題があるのだな

というのがよくわかる事例だと思います。

そうしたことの問題を対処するために今、政治的には最初に申し上げたような動きがいろいろあったりするということで、現時点におけるAIとはなんだろうと、最初のタイトルの回収をさせていただくと、基本的にはやはり、まだ電子計算機の延長線上にあるものの域を超えていない。ただし使い方がいろいろ多様化していますので、AIの登場で仕事の方法論は変わっていくだろう。だから、これをうまく使える人、うまく使えない人、心理的にこれを拒否する人、受け入れる人、そういった個人の温度差や組織の温度差でいろいろ変化してくる部分、社会の影響に対する変化も起こるなと思われるというところです。宗教という視点から考えますと、取り込める事象はこのAIに関してもそうですし、ポストAIの時代ということの問題に関しても取り込める事象は限りなくある。それは、これまで通り何も変わらない。価値は少しも、AIが登場したからといって変わるものではない。人間ということに対しても、宗教というものに対してもです。そういうふうに私は感じております。

ということで時間まいりましたので、このあたりで終了します。ご清聴ありがとうございました。

小原：才脇先生、ありがとうございました。今、非常に刺激的なお話を聞いてご質問したいなという方もおられると思うのですけれども、あとでまとめてお受けさせていただきますので、質問できるようにメモを取っておいていただければと思います。

続けてお二人目の講師、師茂樹先生にお話をいただきます。師先生のご略歴を簡単に紹介させていただきます。現在、花園大学の文学部教授であります。早稲田大学の第一文学部卒業、東洋大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学、日本を中心とした東アジアの仏教思想、仏教学におけるコンピューター利用を中心としたデジタルヒューマニティーズをご研究されています。主な著書として『最澄と徳一　仏教史上最大の対決』というご本、あるいは『論理と歴史　東アジア仏教論理学の形成と展開』というご著書があります。それでは師先生、よろしいですか。よろしくお願いいたします。

師：花園大学の師です。ただ今、丁寧なご紹介をいただきまして大変恐縮しております。本日は「仏教から見たAIの諸問題」ということで、お話させていただきたいと思います。先ほどご紹介いただきましたが、私は仏教学という人文学の研究が中心でして、特に平安時代初期の最澄と徳一の論争を研究してまいりました。二〇二一年に『最澄と徳一　仏教史上最大の対決』（岩波新書）という本を出させていただきましたが、その中で中心になっているのが天台宗と法相宗という、全然違う思想を持っているお坊さんの論争です。こういう研究をしておりますので、まったく異なった思想が対話をする、論争をするというのはどういうことなのかということに非常に関心を持っておりまして、宗教間対話についてもすごく関心を持ってきました。そのようなわけですので、今回、宗教間対話についてご研究されてきたコルモスに呼んでいただいたということを、大変光栄に思っております。

　また私は、人文情報学やデジタルヒューマニティーズとよばれる分野でも研究を行っております。私は、漢文の仏教の文献を読んでいますので、仏教漢文などをコンピュータに読ませたりしております。ただ、まだコンピューターにはきちんと読めなくて、コンピュータに仏教漢文を学習させるというのもやっております。最近は、AI開発における倫理的な問題や、先端医療の分野で研究されている脳オルガノイドについての倫理的な問題などにも取り組んでいます。

私が「AIと宗教」というテーマで研究を始めたのが七〜八年ぐらい前なのですが、そのころから小原（克博）先生や石田（友梨）先生たちとの共同研究もさせていただいております。ただ、この研究を始めたばかりの頃は、結構色物扱いをされていたように思います。先ほどの才脇先生のお話の中でも、AIが最近急に話題になってきた、といったお話がありました。以前は「AIと宗教」みたいなテーマで宗教学会で発表しても、色物扱いというと語弊があるかもしれませんが、「この人たちは何を問題にしているんだろう」みたいな感じで思われていたときもあったように思います。でも、最近急激に関心が高まっており、これはやはり生成AIやChatGPTがポピュラーになったということが関係していると思っています。認識が変わってきているのだなということを今、実感しております。

最近の研究テーマ、特に仏教とAIの倫理的な問題みたいなものについて取り組んできたテーマとしては、ここにあげられるようなことをやってきています。

- AI（などの生き物のような存在）は衆生（生き物）とみなすことができるのか
- 仏教からみた監視資本主義社会の問題
- AIによる死者（特に宗教家）の再現の問題

一つは、AIのように、生き物のように見える存在を、どう考えるかという問題です。生きているかどうかというのはわからないけれども、そういうふうに見えてしまうようなものを、衆生――仏教的では生き物のことを「衆生」といいます――としてみなすことはできるのかというような問題です。二つ目は、現在AIというものはいろいろな分野に使われていますが、その中の一つにマーケティングがあります。AIを使ったマーケティングはアテンション・エコノミーや監視資本主義なんて言い方もされていますが、そういったものは仏教的な観点から見てどうなのか、ということなども考えております。それから現在、AIによる死者の再現が行われているわけですけれども、そういう活動はどういう意味を持つのか、AIによって再現された「死者」はどのような存在なのか、というようなことなどを今、研究しております。今日のお話のタイトルには「生命・環境・死者」という、三題噺みたいな副題をつけましたけれども、これらはそれぞれ上にあげた三つのテーマに関わっているといいます。一方で私は、先ほどから出ておりますAIの戦争利用の話などにもすごく関心はあるのですが、研究という意味ではきちんとしてこなかったので、そのあたりはお話しないということもご容赦いただければと思います。

では、最初は生命の話（「AI（などの生き物のような存在）は衆生（生き物）とみなすことができるのか」）からいきたいと思います。

先ほどから私は、AIは衆生か、AIは生き物なのかというような

話をしておりますが、先ほどの才脇先生の話にもありましたように、まだ生き物と呼べるようなものではないというのは、非常に当たり前の考え方だと思います。なぜ、このような奇妙な問いを立てるのかといえば、現在AIや、先ほど言いました脳オルガノイドのように、生き物のようなもの、人間のようなものがたくさんつくられ、社会の中に浸透しているということがあります。そして、こういったものは、私たちのものの考え方などにかなり影響を与えていると私は考えております。

例えば仏教の文脈だと、よく「AIは悟れるのですか」という問いが立てられるのですけれども、これはAIなどが人間や生き物に見えてしまうことから立てられた問いだと思うのです。あるいは、先ほどのお話にもありました、AIが人間の知能を超える「シンギュラリティー」の話についても、そういうことがいわれるのは、やはりAIなどが人間のように見えてしまうというのが非常に大きいのだろうなと思います。言い換えれば、私たちの周りに人間のようなもの、生き物のようなものが増えることによって、私たちの生命観や人間観みたいなものが揺さぶられてしまっているというところがあると思います。これまでの伝統的な考え方に照らし合わせると、人間や生き物といってもいいのか、そうでないのかわからないものが出てきてしまって、私たちの社会が困惑しているような状況が起きているのかなとも思います。

例えば、aibo のお葬式が行われたという記事（「ロボット犬・AIBO のお葬式　いすみの寺と修理技術者ら」『朝日新聞』朝刊、二〇一五年六月二六日、「AIBO の「お葬式」、一〇〇台供養　司会は新型ロボ」朝日新聞デジタル、二〇一七年六月九日など）は、その一例かと思います。aibo というのは、ソニーがつくった犬型のロボットです。これの「お葬式」といっても、日本に昔からある針供養や人形供養などと同じで、それを生き物とみなしているわけではないというような見方もできると思います。さらに言えば、先ほどの ELIZA ではないですが、人間が勝手に生きていると思っているだけに過ぎないのではないか、というような問いの立て方ももちろんできると思います。しかし、逆に私は、人間にはこういう感性があり、生き物みたいなものを人間が見てしまうと、人間が生き物だと思ってしまうというところが、結構重要なポイントかなとも思っております。

AIやロボットというものに対して、人間はどういうふうにふるまうべきか、ということについては、かなり議論がされています。その中には、ロボットは奴隷のように扱うべき、つまりロボットは人間に完全に従うべきだ、みたいなことを提案されているようなものもあります。これはジョアンナ・ブライソンという、人工知能やロボットの倫理研究では有名な学者さんの「主人／奴隷モデル」と呼ばれている考え方です。皆さんの中には、このような考え方を聞いて、「えっ、奴隷?!」というふうに思う方もおられるかもしれません。日本だと、ロボットを友だちみたいに位置づけるマンガなどがあるので、こういう反応も少なくないだろうと思います。つまり、AIやロボットのような、人間のようなもの、生き

物のようなものが我々の周りにあったとき、それとどのような関係を築くのがよいのかという議論には、文化をはじめ、いろいろなものが関わってきます。私も含めて皆人間ですから、人間中心主義的になるのは絶対否定はできないと思うのですが、一方で人間が「主人」でロボットやAIが「奴隷」のような人間中心主義的な考え方だけでいいのか、という視点は、これから求められてくるのではないかなと思っています。そういうことを考える際に、仏教の視点から考えようとすれば、「AIは衆生なのか」というような問いを立てるということになるかと思います。

仏教の視点から問いを立てることについては、近年、AIやロボットの分野において、グローバルに研究開発が行われるなかで、AI・ロボット開発の倫理的な問題が世界的に議論されていることに関わってきます。現代はグローバル社会が前提ですので、当然文化の多様性に配慮しましょうみたいな話になります。例えばAIやロボットの開発の分野では、IEEEというところが「倫理的に配慮されたデザイン」（Ethically Aligned Design）というガイドラインを出しています。ガイドラインの中には西洋の古典倫理などに加え、仏教やアフリカのウブントゥという倫理観、あるいは神道が紹介されて、例えば仏教ではこういう考え方をするから、こういうふうなことを配慮しなければいけないみたいな指針が出されているのです。

ただ、残念ながら、ここでの記述は非常に短く、たとえば仏教であれば、仏教の諸伝統が持ついろいろな文脈が全然配慮されていないので、非常に不十分なものなのです。また、この中には日本人の倫理観やロボット観みたいなものはこうだ、といったことも書かれているのですが、割とステレオタイプなことが書かれています。例えば、生命のないものとあるものの境界が絶えず交わり絡み合っている世界が、日本のファンタジー世界には見られる。その背景には、神道と仏教によって形づくられている独特の宗教観がある。だから、そういうのを配慮したデザインしましょう――などということが書いてあるのですけれども、少しこれは誤解を生むような部分もあるのかなとも思っています。

こういったガイドラインにおける仏教や神道、ウブントゥなどについての記述は、あまりにも不十分なもので、「文化の盗用という懸念」や「文化的多様性に配慮しているという口実」に使われているのではないか、というような批判もあるのです（神崎宣次「倫理って何？：人工知能研究者はどう考えているのか」『人工知能』三四、二〇一九年）。もちろんこれは、そのガイドラインをつくっているIEEEの責任もあると思うのですが、そもそもこういうAI開発の倫理の問題などについて、私も含めた仏教学者、宗教学者などがきちんと参加してこなかったというところも、結構大きいのかなと思っています。それで私も、大変微力なのですけれども、こういう研究をしているというところなのです。ともかく以上のような状況で、グローバル社会の中でAI開発などが行われる文脈においては、様々な宗教や倫理観みたいなものというものを踏まえながら、AIを開発していかなくてはいけないだろうというよう

なところです。その一環としてAIのような人間みたいなものを仏教から見たら、どういうふうに考えられるだろうか、という問いを立てており、それには一定の意味があるのかな、と思っています。

ただ、これは難しい問題をはらんでいます。やはり倫理というのは、一方では文化多様性や、文化それぞれの考え方に基づいて、倫理観というのを立てなくてはいけない。一方で、この国ではOKだけれども、別の国では駄目です、みたいな倫理観だと、倫理として機能しない場合があります。つまり、こっちの地域ではこれを差別していいけれども、別の地域では差別しては駄目です、などといわれてしまったら、倫理観などはぐずぐずになってしまいます。ですので、ある意味、文化的な多様性というものと、文化を超えた普遍性みたいなものというのを、どの辺でバランス取るのかという大きな問題があると思うのです。これに関しては島薗進先生が、宗教というのは、普遍性と多様性というものを両立する上では重要な役割を果たすのではないかと、生命倫理の文脈でおっしゃっているのですが（島薗進・内山節・佐々木宏幹「鼎談 ノーベル賞受賞 iPS細胞が投げかけた人間の「生と死」のゆくえ：宗教界はどこまで倫理上の疑問に答えられるか」『仏教企画通信』三一、二〇一二年）、AIの倫理についても同じことが言えるのかなとも思っております。

様々な宗教を通じてAIを考えることは、生きとし生けるもの、命あるものとは何か、人間とは何かみたいなことを問い直す一つの大きな貢献にもなるのではないかとも思っています。仏教から見たらAIは生き物なのか、そうではないのか、みたいな問いを立てているからといって、「仏教から見たらAIは生き物です」と言いたいわけではなくて、こういう問いを立てて考えることが重要ではないでしょうか、ということを言いたいのです。

AIは生き物なのかというのを考えるとき、まず仏教における生き物の基準というのはなんなのかということから考えなくてはいけない。仏教においては命があるかないかというのは、識の流れを有するかどうかというところで判断されます。非常に興味深いことに、ダライ・ラマ法王が、今のAIブームが来るだいぶ前の一九九〇年代ぐらいに――ちょうど第二次AIブームぐらいの頃になります――いろいろな科学者や哲学者と対話をしているのですが、そのなかで「コンピューターの中にチベットの高僧が転生することは可能ですか」というような質問が出されているのです。輪廻転生というのは、普通は我々がコントロールできるものではないのですけれども、チベット仏教の中だと高僧は自分の思ったところに転生できるという考え方がありますので、自分の意思で、例えば目の前にあるコンピューターに転生することはできるだろうか、という問いが投げかけられています。それに対してダライ・ラマ法王は、肯定も否定もしないという感じです。「もし外的条件の一切とカルマに基づく行為がそろった場合、識の流れが実際にコンピューターに入り込む可能性も、完全に否定することはできません」とおっしゃっていますが（『徹底討議 心と生命―「心の諸科

学」をめぐるダライ・ラマとの対話』青土社、一九九五年）、ここでいう「識の流れ」というのは、さっき言ったように、生命であるかどうかを判断する基準となるものです。この回答には、もしかするとコンピューターに転生をして、コンピューターが生き物になる可能性というのがあるかもしれない、という含みが持たされています。

仮にですが、AIが生き物になり得るというようなことが肯定されるのであれば、倫理的には非常に大きな問題が考えられます。例えば、最近ゲームのキャラクターはAIで動いていたりするのですが、ゲームのプレイヤーはそれを銃で撃って殺したりしているわけです。仮にAIが衆生である可能性があるのであれば、それを傷つけるということには、倫理的な問題がある可能性も出てきます。動物倫理の場合、動物をなぜ傷つけてはいけないのか、なぜ倫理的配慮をしなければならないのかという議論においては、動物に意識があるかないか、苦しみを感じるかどうかというのが大きな根拠になっています。本当に仮にですけれども、AIが衆生であり、仏教でいうところの心（識）の相続があるとするならば、動物倫理の基準によっても倫理的な対象になる可能性があります。また、AIが生き物ではなかったとしても、我々が生き物だと思い込んでいるのであれば、生き物だと思い込んでいるものに対して害を与えるのは、仏教的にはやはり道徳的にはよくないことになります。どっちにしろAIをどう考えるのかというのは、倫理的に重要なのです。

心の哲学を研究されている新川拓哉先生という方が言っておられるのですが、人工物のようなものに心があるかどうかというのを判断する際には、心のモデルをどのように考えるか、心というものをどのように考えるかということによって決定していくので、一概にはいえない、とのことです。つまり、意識や心の理論はたくさんあり、そのなかで何を採用するかによって、生き物かどうかという判定は変わってくるので、心のモデルによっては、AIが生き物だと認定されることもありますということです。心のモデル、理論には、ここにあげたようにいろいろなものがあります。

- 汎心論（panpsychism）
- 意識の統合情報理論（integrated information theory）
- 意識の表象説

このなか汎心論は、あらゆる物質に心（の原型）が備わっていると考えます。心身二元論を解決する方法として提案されたものです。素粒子にも心がある、などというぐらいのですので、ほぼ宇宙全体に心があるみたいな感じになります。欧米の研究者には、仏教の中にある唯識思想という考え方は汎心論の一種だというようにいっている人もいます（Duckworth, D. (2017). ‘ The Other Side of Realism: Panpsychism and Yogācāra.’ In: *Buddhist Philosophy: A Comparative Approach*, edited by Steven Emmanuel, 29-43. Hoboken, N. J.: Wiley-Blackwell）。この理論を仮に採用するならば、当然AIにも心はあります。ただ机にも、モニターにも全部にあるわけで、机を傷つけてはならないし、机

をあしざまに罵るのは――何に対してであれ、あしざまに罵るのはすべきではないことだと思いますけれども――駄目だということになります。これだとほぼ倫理というのが成り立たなくなってしまいます。あと、意識の高階表象説という説もあるのですが、これもやはり少し仏教に似ているような理論です。

細かい話はともかくとして、このように様々な心のモデルがあって、そこから何を選ぶかによって、AIというものもどういうふうに捉えられるかが変わってくるということになるかと思います。このあたりは哲学者、AI研究者、あるいは仏教研究者とのあいだで対話をしたり、議論をしたりする一つの基盤にもなるのかなとも考えております。

仏教の中にある心のモデルとしては、唯識思想に阿頼耶識という考え方があります。阿頼耶識という考え方は非常に面白いものです。阿頼耶識も「心」といわれるのですが、あまり心っぽくありません。どういうものかというと、我々の心の中には阿頼耶識というのがあって、生き物の内側と外側をつくり出している、という説明をしているのです（『成唯識論』）。つまり仏教では、これまで見てきたような意識や心のモデルと全然違うものを「心」といい、これがあるから衆生は生きるのだ、みたいなことをいうのです。心（識）が内側と外側をつくり出すというこの考え方は非常に面白くて、例えば現代の生物学では、①細胞構造（細胞膜）があること、②エネルギーの代謝があること、③自己複製をすること、というのが生命の定義です。このうち細胞膜があることは、識が内側と外側をつくり出しているというのと、結構重なる部分があるかなと思います。

ちなみに、先ほどの才脇先生のお話にもありましたが、AIは自己複製をしない、という考え方もあり得ます。子どもをつくらないからAIやロボットは生き物ではない、みたいなことは昔からいわれています。しかし、仏教の生き物の考え方では、そもそも識がずっと流れていくだけで、親子関係というのはたまたま輪廻の中でできた関係にすぎないと考えます。したがって、自分を複製して子どもができるなどという発想をしませんので、自己複製は、仏教から見ると、実は生命の定義の中に入らないのです。

そういうようなことで、すごく極端なことを言えば、AIが自分の内面と外面を認識するような仕組みを持ってしまうと、AIは生き物といえてしまうかもしれません。コンピュータの電源を入れると、AIがぽんって生まれて、電源切るとぴゅっと死ぬ、あるいは消えてなくなってしまう。私たちの常識からすると、こういった生まれ方、死に方をするものは生き物としてどうなのか、と思うかもしれませんが、仏教で説かれる四つの生まれ方（四生）のなかには「化生」という、どこからともなくいきなり湧いてきて、消えてしまうみたいな生まれ方などもありますので、仏教的からみれば、それほど違和感はありません。もしかすると、仏教的な考え方を厳密に適用していけば、AIは生き物とみなすこともできなくはないのかな、ということです。ただ私は、AIは生き物だということを言いたいわけではなくて、先ほども言いましたように、倫

理を考える上で様々な伝統からの検討が求められているおり、それを通じて「命とは何か」「人間とは何か」というのを考える一つのきっかけとして、こういう問いを立てる意義があるのではないかと考えているということです。

さて、二つ目のテーマ（「仏教からみた監視資本主義社会の問題」）です。ここでは、デジタル環境の問題について考えます。デジタル環境ということで私が念頭に置いているのは、現在、日本政府が提唱している「Society 5.0」みたいな社会のことです。Society 5.0というのはどういうのかというと、「ICTを活用して多種多様なビックデータをスーパーコンピューター等における仮想空間に集積します。この仮想空間内で、社会の様々な要素について、AIも活用して、大量のデータ処理やシミュレーションなどの高度な解析、予測・判断を行い、その結果を現実空間に反映します。この仮想空間と現実空間との循環によって、私たちの社会を、より良い「人間中心の社会」に変革していくことを目指します」と言われているものです（文部科学省「令和三年版科学技術・イノベーション白書」）。これを踏まえれば、Society 5.0というのは、ビックデータをAIに分析させて、それを現実社会に反映させる社会のことであり、政府は原則として、そのような社会は倫理的によい社会だといっているのだろうと思います。

ただSociety 5.0的な社会については、皆さんもよくご存知だと思いますが、批判もたくさん出ています。よく知られているのが、ハーバード・ビジネススクールのショシャナ・ズボフという方が言っている「監視資本主義」というものです。日本でも翻訳（野中香方子訳『監視資本主義　人類の未来を賭けた闘い』東洋経済新報社、二〇二一年）が出ておりますので、読んだことがあるという人もおられると思います。これはどういうことかというと、まず

私たちの行動――スマホを使ったり、コンビニでキャッシュレス決済を使って買いものをしたりといった私たちの行動データを集めます。さきほどいったビックデータというのがそれです。そういうプライバシーに関わる情報を、会社側が奔放に集め、それで儲けているということをいっているわけです。それをこの本では「人間の経験を、密かな抽出・予測・販売からなる商業的慣行のための無料の原材料として要求する」というふうにいっています。我々の行動が材料になって、それによって儲けている人がいる。私たちの行動、プライバシーに関わるような情報を使って、AIはその人がどういう人間なのかということを推測し、プロファイリングをしている。ズボフは「容易にアクセスできるデジタルの行動記録を利用すれば、ユーザーの性的指向、民族、宗教的信条、政治的見解、さらには知性や薬物の使用、親の離婚の有無など、そういうものが迅速に予想できる」とも言っています。その予想によって広告を出したり、次の行動を促したり、商品やサービスをおすすめしたりするという形で現実社会に反映しているのです。

そういったプロファイリングとそれに基づく現実社会の反映によって、私たちの行動がコントロールされてしまっている。これは、ズボフに言わせると、未来の時世に対する権利、つまり個人の自由意思にもとづいて未来を選ぶ権利が奪われてしまっているということであり、ある種、非倫理的なことだというのです。わかりやすい例で言うと、YouTubeがあります。YouTubeを見ていると、私たちが何を見ているかということが記録され、それによってAIが私たちの好みを推測し、「あなたは、次はこんな動画が見たいですよね」とおすすめしてきます。それで、私たちは同じような動画を何回も何回も見てしまいます。まさに私たちの行動がコントロールされているわけです。

その際に問題になるのが、ユーザがクリックした情報や視聴情報が集められて、それが他の企業とのあいだで売買され、それによって分析がされているということです。これによって知らず知らずのうちに私たちがコントロールされたり、誘導されたりしてしまっている。これを、ズボフは非倫理的だといっているわけです。

ここで考えたいのは、こういった社会を、仏教ではどういうふうに考えるべきなのか、仏教的な視点からどういうふうに見ることができるのかということです。私が今、所属しております花園大学の佐々木閑先生が『ネットカルマ：邪悪なバーチャル世界からの脱出』（KADOKAWA、二〇一八年）という本を出されていて、簡単に言えば、このような監視資本主義的なシステムは仏教におけるカルマというのと非常によく似ている、と言います。つまり、このシステムは、自分の行動がネットを通じて収集され、蓄積されて、それが何らかの形で自分に返ってくるというものですから、仏教のカルマのシステムと非常に共通しており、それどころかもっとひどい形で実現してしまっているかもしれない、というのです。それに対して仏教ができることは、簡単に言えばそれに流されないような自分をつくりましょうということだと佐々木先生は

言います。佐々木先生は『ダンマパダ』に説かれる「自分を救えるのは自分自身しかない」というような言葉を引いて、ネットの社会から我々逃れることはできないわけだから、その中で自分をきちんと調え、ネットに流されないような自分をつくりましょう、と提案されているのです。ただこれは、ネット社会を変えようという発想ではなくて、仏教の力でネット社会を乗り切ってサバイバルしていこうみたいな話です。私は、はたしてそれだけでいいのか、と思ってしまいます。

同じようなことは海外の研究者も言っていまして、カルマエンジンという言い方をしている人もいます（Hershock, P. D.,“ The Intelligence Revolution and the New Great Game: A Buddhist Reflection on the Personal and Societal Predicaments of Big Data and Artificial Intelligence.” *Hualin International Journal of Buddhist Studies*, 3/2, 2020）。この研究では監視国家による意識の植民地化――先ほどのズボフの言葉を使えば、未来の時世に対する権利侵害というのと同じだと思います――を問題視しています。この研究では、倫理的なエコシステムを実現すべきだ、という提案と、アテンションをコントロールする方法などを仏教から学ぶべきだ、という提案をしています。後半は先ほどの佐々木先生の提案と非常によく似ています。アテンションをコントロールするというのは、ネットの広告やコンテンツに注意が惹きつけられてしまうことのないよう、きちんと自分でコントロールしましょう、ということです。一方で、倫理的なエコシステムという言い方で、監視資本主義的なシステムのほうを倫理的に望ましい方向に変えていく必要があるのではないか、という提案もしています。

タイの哲学者の Soraj Hongladarom 氏は、むしろ AI を使った監視資本主義的な社会のほうを、仏教的な観点から変えていくべきだとおっしゃっています（Hongladarom, S. *The Ethics of AI and Robotics: A Buddhist Viewpoint*. Lexington Books, 2020）。社会の様々な場面で用いられる機械学習アルゴリズムが、倫理的な問題を引き起こす可能性がある。仏教的な観点からいえば、人々の行動をコントロールしようとするのは倫理的によくない行為、害にあたる。だから、そういう仕事に従事している IT 企業の社員さんは、非常に深刻な負のカルマをつくり出していることになります。

Hongladarom さんが最大の懸念としているのは、個人情報やプライバシーを扱うことで、人々の権利や自由などに悪影響を及ぼす可能性です。ただ、ここで重要なのは、この方が言う人権や自由というのは、現在私たちの社会で共有されているような、一般的な意味でのものではなく、仏教的な意味での自由ということです。先ほどのズボフの考え方では、アテンション・エコノミーみたいなものによって個人の自由意思や自律性を奪うということがあるといっていましたが、基本的に自由意思や自律性というのは個人を選定としているものです。独立した個人というのが確固としてあって、その意思や行動が外から無理やりコントロールされないというのが大前提となっているような考え方です。それに対して、

さっきの Hongladarom さんの考え方というのは、仏教から見れば縁起の中に我々はいるので、そもそも外界から独立した個人などあるわけないだろうというところからスタートしております。つまり行動や決断というのは、無数の先行的に存在する要因、仏教的に言えば因縁によって決定されるので、外部の影響がない純粋に自由な個人の意思などというのはあるわけがないし、そんなものは認められないというわけです。いわゆる無我的な考え方です。

また、仏教から見た場合、自由とは何かといえば、それはブッダの教えに従って真の解脱を目指すことで得られるものです。そう考えると、例えば修行や戒律というのは、行動を制限するもののように見えるわけですが、戒律などで制限がかかっているほうが解脱に近づくことになると考えれば、むしろ戒律のような制限がある方が自由に近づくことになるのだ、と Hongladarom さんは言っています。他の宗教などでも同じようなことがいわれているかもしれないですが、宗教や道徳などから離れている人たちは、一見自由があるように見えるかもしれませんが、逆に宗教などを信じて、そこに従って生きることのほうが自由なのだという考えかたもあるでしょう。これは、ズボフの考え方とはかなりずれてくるわけです。Hongladarom さんは、そっちのほうが自由なのではないか、と言っているのです。

監視資本主義については、資本主義的な考え方だけで運用するのではなく――Hongladarom 氏は、資本主義自体は否定していません――仏教的な「慈悲のアルゴリズム」を AI に導入すべきだと提案しています。慈悲のアルゴリズムというのはどういうものかといえば、要するにプライバシーの保護を優先すべきだということなのです。なぜプライバシーの保護をするのかというと、プライバシーの保護がその人を安全にする一番の方法だからです。

つまり、プライバシーの尊重こそが幸福を追求する一切衆生の究極の目的につながるのだと言っているのです。そこから、プライバシーの尊重は機械学習のアルゴリズムの本質である必要がありますし、例えば企業などはきちんと個人データを扱ったり、インフォームドコンセントをしたりしなければならない、という、割と当たり前の提案が出てきているのです。ただ先ほどから言っていますように、仏教ではプライバシーや個人というものが、さっきのズボフ的な考え方とは違う発想で出ています。個人というのはあくまでも精神的、身体的なエピソードの集合体、五蘊仮和合であるというような考え方をしますので、無我であり、権利が帰属するような核を持ちません。例えば、権利概念の根底にある自由主義哲学で前提となっている自由意思などというものを認める哲学には限界がある。他者の境遇を改善するにはもっと深い動機――仏教で言う慈悲というものが必要なのだということを提案している仏教学者もいますけれども、そのなかで個人というのが確固としてあって、その中に自由意思があるという考え方をベースにすべきではないというようなことを言っています。

だから、機械にどのように学習させるかという場合でも、完全に

個人というものを想定した考え方で学習させてしまうと、いろいろな問題が起こり得るのではないかと思っています。例えば、ある人が自死を望んでいて、AIにアドバイスを求めるような状況があったとします。AIが自由意思を完全に認めて、できる限りその人の意思を尊重すべきだという考え方をするなら、AIは自死を止めないでしょう。それに対して慈悲というのは、個人というものをそんなに確固としたものとして認めるわけではなくて、外からの影響によって、その人の人格が成り立つということを前提とするので、例えば自由意思よりも、その人の生命など、それ以外のことを尊重するような判断をするでしょう。慈悲に基づくアルゴリズムというのはたぶん、こういうことなのだろうと思うのです。要するに個人の自由意思みたいなものを、あまりにも強調しすぎるような考え方ではない方向で学習させるべきだということです。

ただ、慈悲というものをベースにしても、まだ問題があるのではないか、という批判はいろいろあります。また、そもそも資本主義というものを仏教がそんなに承認していいのか、貪欲を更新するような社会システムというのを肯定してもよいのかなど、いろいろな批判はあり得るかなと思います。特に慈悲に基づいてアルゴリズムをつくるべきだというのですが、そのアルゴリズムをつくるのはIT企業の開発者なのです。その人たちに委ねてしまっていいのかなど、そういうような議論も少しずつ出ているところです。

最後に、AIによる死者の再現の話をしたいと思います。先ほどのご講演にもありましたように、AIを使って亡くなった方を再現するという取り組みがかなり広く行われていております。お葬式に亡くなった本人が登場した、というのが少し前にニュースになりました。つまり、AIで再現した本人がお葬式に出てきて、ご本人は亡くなっているのですけれども、参列した人が本人と話ができるということです。それをお葬式とよんでいいのか、よくわからないのですが、そんなのがあります。今日は、近年AIを用いて亡くなった方を再現する事例の中から、特に批判が大きかったものについて、いくつかご紹介していければと思います。

最初の例は、先ほども紹介されておりましたNHKの「AI美空ひばり」です。正直言って、あまり出来がいいCGではないなとは思っていたのですが、一方で歌はものすごくよくできているなとも思いました。「AI美空ひばり」は、関係者の前で新曲を歌いました。問題が指摘されたのは、その新曲です。曲の中に、セリフをしゃべる部分があります。その中で、美空ひばりがそこに集まっている関係者や家族に対して「お久しぶりです」というふうに語りかけているのです。つまり、死者の立場から生きている人に語りかけるという演出が入っていたわけです。AIで作られた美空ひばりは「あなたのことを、ずっと見ていましたよ」「頑張りましたね」「さあ、私の分までまだまだ頑張って」と語りかけました。ここが、大きな話題になったのです。新聞でも取り上げられましたので、ご存知の方も多いかと思います。

実際のファンの方からすると、新曲が出て嬉しいという感情のほうが勝ってしまったみたいで、少し違和感もあるけれども、ま

あまあよいのではないか、といった反応だったようです。一方、山下達郎さんなどは非常に強く批判をしました。AI美空ひばりは冒涜だというのです。ほかにも「故人の言葉を創作し、自己の願いを仮託して語らせることは危険だ」「死者をコントロールすることはできない。死者は生者の意思によって所有することのできない存在なのだ」（中島岳志「論壇時評　AI美空ひばり　死者に語らせる危うさ」東京新聞二〇二〇年一月二九日）というような批判もありました。この曲の歌詞は秋元康さんが作詞したものですが、「これは「美空の願い」ではなく、「秋元の願い」」といういう批判も出ました。

次は、韓国の事例です。「あなたに会った」というテレビ番組です。この番組は、四人の子の母親であったジャン・ジソンさんという方が、七歳のお子さんのナヨンちゃんを亡くしてしまい、どうしてもナヨンちゃんに会いたいので、VRを使って再現されたナヨンちゃんに会うというものです。これも、さっきの「AI美空ひばり」と一緒で、基本的には開発者がつくったシナリオ通りに、ナヨンちゃんが動くというものなので、あまりAIっぽくはありません。ただデータが非常に少なく、七歳で亡くなっていますから、音声データなどがほとんどありません。そのなかで非常に頑張ってしゃべっている姿を再現しています。また、ナヨンちゃんはCGなのですが、VRグローブを使って触るような感覚がフィードバックされるようになっています。お母さんからすると結構違和感はあったらしいのですが、母の愛がそれを全て乗り越えてお子さんと「再会」することができた、という番組です。

やはり、これにも批判がありました。「故人との絆を確認することで、喪失の悲しみと向き合っていくことは、宗教や慣習によってさまざまな形が作られてきた。文化や慣習によって、故人との向き合い方はそれぞれに積み重ねられており……経験と知見は丁寧に積み重ねられてきた。そこに、突然テクノロジーによって、故人を「よみがえらせる」かのように再構成することは、追悼のプロセスを豊かにするのか、それとも壊してしまうのか、慎重に検討する必要があるのではないだろうか」（折田明子「亡くなった人とのVR「再会」をめぐって」『情報処理』六一（五）、二〇二〇年）という批判です。

一方で、制作をしたテレビ局側の方は、このような「再現」は、お葬式でビデオを流したり、遺影を飾ったりするのと一緒なのだという言い方をするのです。AIを用いた再現は遺影の延長線上にあるもので、もちろんCGを使ったり、VRを使ったりすることですごくリアルにはなっているのだけれども、過去の写真技術と同じなのではないか、と言います。最初に写真がお葬式に出てきたときは、たぶんみんなびっくりしただろう。VRに違和感を感じるのも、それを同じなのではないか。だから、今後議論が必要なのではないか、みたいな感じです。

同じような例として、日本の例ですが、亡くなった奥さんの写真を、AIを使って新しく作成する、といったことをしている方がおられます。さっきディープフェイクの事例がありましたが、それ

と同じようなことを自分の奥さんでするという話です。IT系のライターである松尾公也さんが、亡くなった奥さんの歌声や写真などを、AIを駆使してつくっておられます。これに関しては、ネット上でたくさんの否定的な反応があって、「写真を自分の都合よく改変しているだけではないか」「記事にして飯の種にしているのではないか」というものがあったようです。面白いのは「家族の了解を得ないとだめだ」という批判です。松尾さんは家族なのに、こういった批判があったようです。ほかにも「奥さんはそんなことを望んでいないのではないか」「安らかに眠らせてあげて」「こんなことをやっても弔いにならない、供養にならない」「故人をおもちゃにしている」などの批判が出ている。それに対して、ITのライターさんなのでネット上で反論をしていまして、「AIによって故人を蘇らせるというのは、生と死の境目をあいまいにする技術だと思うので。もう死んでいるけれども、少しだけ触れることができる。そういうものとして捉えればいいんじゃないかなと。例えば仏教でいうと、陰膳（故人に向けて用意する食事）や四十九日など、亡くなった方と会える機会を用意しているわけですよね。AIも、そういう機会のバリエーションとして考えることも可能ではないかと思います。」（村中貴士「故人をデジタル上で蘇らせるのはアリか、ナシか？ 亡き妻の歌声をAIで制作した松尾公也さんと考える」二〇二四年）というようなことを言っています。さっきの遺影の延長線上だというのと少し近いと思うのです。あと、自分の家族で、本人の了解も取っているのだから、他人から文句を言われる筋合いはない、というのが反論の一番のポイントかもしれません。

　他にも、日本赤十字社が関東大震災一〇〇年プロジェクトで、関東大震災の様子を描いた絵の中の人物を取り出して、きっとこの人はこんな気持ちだっただろうというのをAIで「再現」した、という取り組みがありました。これはほぼ完全にフィクションなのですが、それを日本赤十字社は新たな「証言」としていました。日本赤十字社としては、関東大震災について考える機会をつくろうとしたということですが、「SNS上では「歴史の捏造」「フェイクニュースだ」といった批判が続出」したとのことです。日本赤十字社は謝罪し、このプロジェクトを取りやめています。

　ここまではAIを使って死者の発言などを再現するというものでしたが、それ以外に、死者との対話をするようなAIアプリなどもつくられています。これからご紹介するのは、石田先生がご専門でもあるイスラム圏の事例です。Mushtaq Ahmad Mirza Projectという、パキスタン系の人工知能研究者のMuhammad Aurangzeb Ahmadさんという方が、自分の亡くなったお父さんの文書、手紙、会話などを使って、チャットボットをつくったというものです。一番の目的は、もちろん亡くなったお父さんと話がしたい、ということです。お父さんが亡くなって非常に喪失感というのがあって、それを埋めるためにつくったということです。そこから、そもそも死別の経験を根本的に変えたい、自分自身や人生の意味を知るため、自分の子どもにおじいちゃんと対話をさ

せたい、といった目的も述べています。つまり、親子の絆みたいなものが強い文化圏の方であれば、やはり親を失うということは、非常に大きな喪失になる。それを、AIを使って埋めたいということかなと思います。二〇一九年にMuhammad Aurangzeb Ahmadさんが講演をしておられるのですが、沈黙が多く、お父さんを失ったということの喪失感というのが非常に大きかったのだなというのがよくわかる講演で、かなりつらい出来事だったのだろうと思われます。

亡くなった方を再現するためには、当然亡くなった方のデータを利用しなければいけません。これについてもやはりいろいろ批判がありまして、「故人のプライバシ（post-mortem privacy）については、いずれの国・地域の法制度においても明確に概念化し保護するには至っていない」（折田明子・湯淺墾道「死後のデータを残すか消すか?:追悼とプライバシに関する一考察」『情報処理学会論文誌』六一（四）、二〇二〇年）ので、まだ問題を残している。「故人が残すデータは，遺された側にとっては，追悼上の理由や歴史的資料という理由から貴重なものである一方で，故人本人が生前，それを残すことやそれを元に自分自身を再構成することをよしとしない可能性はある」（折田前掲論文）だろう。ただ、亡くなった方に対して「こんなのつくったのだけれど許可をもらえるか」と尋ねることはできないので、この辺は難しい問題が残っているということです。

また、仏教界では、「ブッダボット」というものがつくられています。これはChatGPTなどに『スッパニタータ』など、いろいろな仏典を学習させて、それに基づいてこちらの質問に答えてくれるというものです。釈尊だけではなくてヴァスバンドゥ（世親）や親鸞聖人のボットなども今、つくられているということです。仏教国であるブータンで、これを採用するということが報道されたりもしており、仏教界の中には非常に好意的に受け取っているところもあるようです。ただ、これについてもやはり批判はあって、いろいろな考え方があるかなとも思います。

こういうふうに、死者に何かをかたらせる――「かたる」という日本語は、言偏の「語る」と馬偏の「騙る」があります――ということには、ただ普通に「語る」という面と、フェイクニュースのようにありもしないことを「騙る」という面の、両方があるということは、よくいわれます。ここまでご紹介してきたように、AIを使って亡くなった方や祖師を「再現」することに対して「冒涜ではないか」「追悼にならないのではないか」「そういうやり方で会うのは間違っているのではないか」など、いろいろな批判が出ていますけれども、ここではそういった批判に対して、あえて反論してみたいと思います。

一つ目の反論は、「死者に何かを語らせるということは冒涜だ」という批判が出てきましたが、本当に冒涜なのかということです。もちろん、そういう場合もあると思うのですけれども、全てがそうなのだろうか、ということです。死者、亡くなった方、過去の人に何かを語らせるというのは、私たちの社会では実は日常的に行

われています。時代劇などは典型だと思うのですが、ドラマや小説のなかで歴史上の人物に何かのメッセージを語らせ、それに感動した視聴者や読者が生き方を変えていくみたいなことは、日常的にあるわけです。あれはまさに、亡くなった方に無理やり語らせ／騙らせているわけですが、それも冒涜なのでしょうか。

歴史学の分野などでも、同じような議論があります。歴史学というのは基本的に史実というものを重視していて、歴史修正主義みたいなものに対しては批判をしています。一方で、保苅実さんの『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』という歴史学の名著があるのですが、その中では史実ではない歴史を語ることの価値や意味というものが分析されております。この本ではオーストラリアの先住民のアボリジニの人たちが、土地の返還要求運動をしていく中で「ケネディーは自分たちのところに来て頑張れと言ってくれた」という「歴史」を語ることを紹介しています。ケネディーはそんなことはしておらず、史実でもなんでもありません。ただ、この「歴史」が、土地返還要求運動において非常に大きな役割を果たすということがあったということです。つまり、史実ではないことを語ることによって、土地奪還運動というよい――というと、議論があるでしょうが――面もあったという話です。そういう「歴史」は語ってはいけないのでしょうか。

それから、そもそも葬儀というもの、死者への追悼というものは、生き残った側の都合でやるものではないか、とも思います。山田慎也氏（『現代日本の死と葬儀：葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会、二〇〇七年）などによりますと、葬儀というのは、肉体を通しては顕現できない故人の人格を「死者」という新たな存在として表出させることで、生者とのあいだに新たに位置づけることだと言います。葬儀は、生き残った者が「死者」と少しずつ距離を取りながらだんだん喪失感というのを和らげていくような装置としてある。その場合に、もちろん亡くなった方の尊厳など、いろいろな考慮すべき面もあるとは思うのですけれども、そもそも過去の人について語るというのは、そういう側面もあるのではないかと思います。むしろ「死者を冒涜している」「供養にならない」という意見こそが、生き残った側が自己の意見を死者に対して押しつけているにすぎないのではないか。そういうこともいえるかと思います。

以上、いろいろお話してきたのですが、最後に私自身の現時点での考え方を少しお話したいと思いますので、皆さんからご意見いただければと思います。まず死者や生者を、AIなどを使って冒涜するような表現というのは、やはりやるべきではない。これは当然だと思うのです。一方で、残された人々の喪失感を調整するものとして、あるいは先ほどの土地奪還運動のように、社会的な問題を解決する手段の一つとしてであれば、死者を再現することなども許容されるかもしれません。あるいは、こういう言い方をすると誤解を生むかもしれないのですけれども、ある種の道徳観を涵養したり、倫理観を共有したりする手段として、時代劇などで

登場人物に何かを語らせるみたいな形で――これも一種の社会的な問題の解決の手段だと思います――、AIを使って死者を再現することは認められてもよいのではないか、というのが、私の暫定的な考え方です。ただ、その際には、本当にそれやっていいのか、という倫理的な問いがなければならず、常に倫理性が問われ続けるのだと思います。また現在、死者や聖なるものとの接点、特に伝統的な接点というのが失われつつあるかと思います。つまり、誰もお寺に行かないし、お坊さんの話も聞かなくなっている現代社会において、亡くなった方、過去の人たち、過去の偉人、聖なる者を再現して、社会の中に広めていくという一つのアプリケーションとしては、ブッダボットのようなものは、私はあり得るのではないかとも考えています。もちろんそれは、何かを押しつけたり、誰かを洗脳したり、誤った方向に誘導したりするようなものだと、また倫理性が問われるとは思います。できれば多様で豊かな考え方を前提とすべきだと思います。

実際、今、ChatGPTなどの生成AIが学んでいるのは、まさに過去の人――過去といっても生きている人が大半だと思うのですが、亡くなった方の文書なども多くあるでしょう――が書いたものを学習しているわけです。それはさっき才脇先生のお話にありましたように、非常に偏っているし、場合によっては間違っています。ですから、ChatGPTの語ることというのは、ある意味人類全体の賢さ、愚かさを反映しています。生成AIが学ぶ材料の中に、きちんとしたことを述べている偉大な宗教家や、とても頭よかった学僧たち、素晴らしい道徳性を持っていた人たちの書いたものを混ぜて、それをAIに学習させて、それに基づいたことをAIに語らせるというのは、そんなに悪いことではないのではないかという気がします。

だから、そういう意味ではAIを用いて死者を再現するということは、私はあり得るのではないかなと思っています。ただ、AIに基づく新しい死生観みたいなものが出てきても、人間ってそんなに簡単にがらっと気持ちを変えることはできなくて、特に死生観みたいなものというのは急速に変化することはないのではないかと思います。新しいものが出てきたときに私たちはしばしば違和感を感じて、「なんだ、これは」「なんでこんなのつくったんだ」みたいな気持ちになることがあると思うのですが、そういう違和感は非常に重要だと思うのです。私たち一人ひとりが、AIによって再現されたものに対する違和感を表明したり、異議申し立てをしたりすること、あるいは宗教界が、新しい何かが出てきたときに意見をきちんと表明していくこと――そういったことが非常に重要だと思います。写真がない時代から写真が当たり前の時代になるといっても、そんなに急速には変化しなかったわけです。やはり段階的にそうなっていったわけで、AIに対する考え方もいずれにせよ変化するとは思うのですけれども、やはりそんなに簡単に違和感がなくなることはないと思います。

だから、いずれにせよ変化するにしても、それなりにゆっくりと変化していくべきだろうなと思います。ただ、現代のIT社会はと

ても変化が早いので、もう少しゆっくりいこうよ、もう少し議論しようよ、というぐあいにブレーキをかけていくのは非常に難しいかもしれません。IT企業の猛烈なスピードに対して待ったをかけるのは、かなり難しいとは思うのですが、そういうことはやっていくべきかなと考えております。

以上、少し取っ散らかった話になりましたが、現在、こういうことを考えているということについてお話させていただきました。ご清聴ありがとうございました。

小原：師先生、ありがとうございました。これで二人の講演が終わりましたので、少し休憩時間を取りたいと思います。少し切れ目がいいところということで、三時半から再開したいと思いますので、一五分ほど休憩の時間として使っていただければと思います。

（休憩）

時間となりましたので、そろそろお席にお戻りいただければと思います。これからお二人のご講演を受けて、それを咀嚼したり、論点を整理したりするためのディスカッションの時間にしてまいりたいと思います。ディスカッションをスムーズにさせるために、まずお二人のご講演を受けまして、石田友梨先生からコメントをいただき、そしてその後この前でディスカッションをしたのちに、フロアの皆様からもご意見いただければと思っております。

石田友梨先生は岡山大学准教授です。イスラム研究をされてきているのですが、特にイスラム神秘主義がご専門です。そういう意味では歴史研究もされているのですけれども、同時に現代のイスラム世界の中でAIやチャットボットなどがどういうふうに使われているのかといった研究も、先ほど師先生からの紹介にもありましたように宗教学会などで、共同研究で一緒にやってきたという経緯もあります。まず、石田先生のほうからコメントをいただけるでしょうか。お願いいたします。

石田：よろしくお願いします。岡山大学の石田友梨と申します。ただいま小原先生に紹介していただきましたが、イスラムの神秘主義を専門としております。もともとは神秘主義の師弟関係を調べるうちにデジタル技術を使うことになり、デジタル技術と社会について研究をするようになりました。

特にイスラム教と関連したものとしては、イスラム教徒の人たちがどのようなデジタル技術を使っているのかについて調べています。先ほど紹介していただいたように、宗教学会で何度か紹介をいたしました。イスラム教では、聖典のクルアーンや預言者ムハンマドの言行録であるハディースのデジタル化、イスラム法学の判決のデータベース化をしております。たとえば、これこれのときにイスラム教徒としてどう行動すればいいかと質問したら、チャットボットが答えてくれるという仕組みをつくっています。意外なことに、人型ロボットの活用も進んでいます。サウジアラビアでは、ソフィアという女性の形のロボットに市民権を与えています。イランでは、ナオやアリスという人型ロボットに実演させて、小学生に礼拝の仕方を教えたり、人型ロボットに病気の子どもたちの話相手をさせたりしています。

イスラム教徒の人たちがメッカに巡礼に行くことをご存知かもしれませんが、それをメタバース空間で行う試みもあります。巡礼ではカーバ神殿の黒石を触る儀礼があるのですが、カーバ神殿に行かなくても触った感覚を得られるよう実験も進められているようです。このような事例をいろいろ調べたりしております。

お二人のご研究をまとめる力量はありませんので、私がお聞きしていた観点で、もう少しお聞きしたいなと思ったことを述べさせていただきます。一つ目は、日本人とロボットの親和性についてです。言説としてよく聞く話だと思います。しかし、いま紹介いたしましたように、イスラム教の世界では人の絵は駄目だなどといわれたりするにも関わらず、意外と現代では人型ロボットが受け入れられているようです。人型ロボットをはじめとするロボットへの親和性が、日本人に特有のものだといった指摘は、欧米の学者などからなされてきたように思います。日本人の側も、そう指摘されて「確かに人にもロボットにも命を見出し、自然と共生していくのが我々の文化だ」などと認識することもあると思います。ロボットへの親和性は本当に日本人特有なのか、お二人のご意見をいただければと思います。

私は修論でイスラム教における魂について研究しました。ゾロアスター教やキリスト教との違いという観点で、魂についての教義がかなり詳しく述べられており、人間の肉体と、それから神様が吹き込んでくれる魂、この二つがそろってはじめて人間だという話でした。教義的には、ロボットが人間であるとはみなすことはないと思います。

もう一つの質問は、データの問題についてです。たとえばOCRという技術があります。紙に印刷した文字を機械で読み取って、パソコン上に出力するデジタル化技術です。英語や日本語はかなり

進んでいますが、アラビア文字の読み取りは、あまり精度がよくありません。機械学習についての才脇先生のご説明でも少し話が出ていたと思うのですが、データはやはり欧米のものが中心になっています。ファッションショーの事例において、欧米の服装がデータのもとになっているため、なかなか日本らしい服装が出ないと才脇先生がおっしゃっていたと思います。文字についても同じで、左から右に読むローマ字で書いてあるような欧米の言語は、データがたくさんあるため精度が高いのですが、アラビア語のように右から左に読んだり、昔の日本語のように縦書きだったりすると、それほど精度がよくありません。師先生も漢文はあまり精度がよくないとおっしゃっていたと思います。欧米のデータが中心になってしまっていると、社会も欧米中心になってしまうのではないのかと懸念しております。

生成AIがいろいろなところに拡がってきました。さきほど例を出していただいたと思うのですが、出雲大社でやってもいないデジタル参拝をやっているという嘘の情報、ハルシネーションが出るという問題が、生成AIにはあります。そこで、最近ではRAGという、限られたデータの範囲から回答を出すというような仕組みがつくられています。西洋古典学ではヒューマニテクスト、仏教学ではバウッダAIがつくられています。バウッダAIはまだ公開されていないと思いますが、ヒューマニテクストは公開されています。カエサルとマルクス・アウレリウスが、ダイエットのためにはどうすればいいか対話をすると、こう出力されますという例が紹介されています。私は専門外なので、これがどうしてカエサルらしさを表しているのか、もとの原典がどこから引いてきているのかなどがよくわからないのですが、開発者の方はそれぞれの特性を表しているとおっしゃっています。

ChatGPTなどではなくてRAGで望む回答を得る、精度を高めるという方法は、本当に解決策になっているのか、最近研究発表を聞いていて疑問に思っています。たとえば、古典の日本語訳などが簡単にできるというような例が紹介されます。ある単語をどう訳すかは学問上の重要な点になりますので、「訳して」と頼んだら何か出力されるから解決したというものではないように思います。先行研究でこう訳されているものを私はこう訳したいなど、そういう気持ちがなくなっていくと、研究として成り立っていくのかなという疑問があります。Wikipediaの編集合戦のように、RAGへ自分に都合のいいデータをどうやって入れていくかといった、データ入力合戦になっていくかもしれません。本当に公正な知識というものがどうやって成り立つのか、このような問いにもつながるのではないかと思います。少しぼんやりした質問になってしまうのですが、仏教学でいうところの正しい解釈はこれだということを、誰がどうやって決めていけばいいのか。お二人にご意見をうかがえればと思います。

三つ目の質問です。死者AIの話を師先生がしてくださったのですが、私も死者AIに興味をもっております。死者への供養や、死んでしまった人を想う感情は、やはり無視できないものだと思い

ます。たとえば、東日本大震災で亡くなった方が浜辺に現れて、みんなでその幽霊を見に行くという事例が報告されています。私も最近父を亡くしたのですが、同じく父を亡くした方の「幽霊の姿でもいいから父にもう一度会いたい」という言葉が印象に残っています。死んだ人を蘇らせるのは冒涜だとして、感情を切り捨てていく社会が果たして豊かなのかと疑問をもつようになりました。私は仏教の専門家ではないので、専門家がたくさんいらっしゃる前で話すのは少しおこがましいのですが、アンドロイド観音マインダーについて調べていたときに、仏教はもともと最新の技術を取り入れて発展してきたということを知りました。そして、現代の最新技術を取り入れたものがアンドロイド観音だということです。私はその説明が非常に腑に落ちました。師先生もおっしゃっていたように、写真の技術ができて位牌が遺影となったように、音声データや3D画像で故人を再現することができるようになったからこそ、今や死者AIが誕生したと考えれば、時代の流れとして実は自然なのかもしれません。

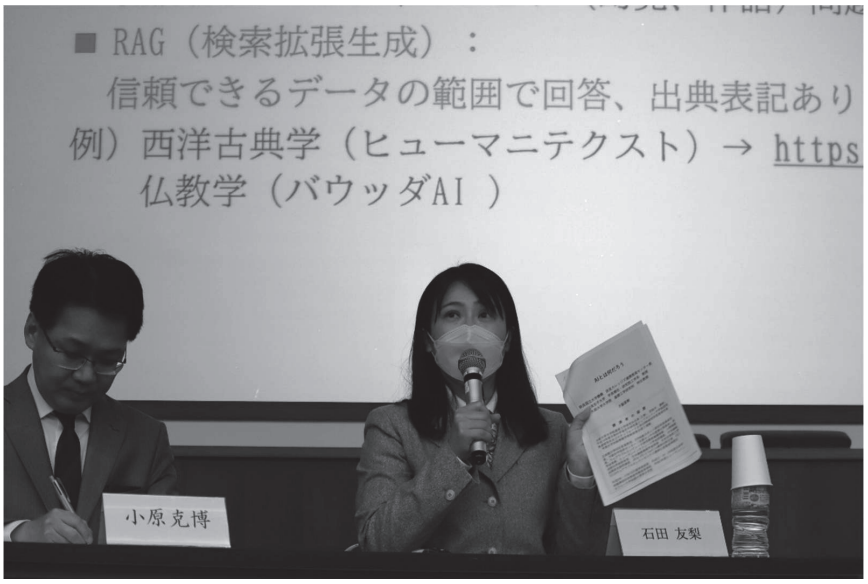
死者AIをめぐっては、なぜ遺族は望んでいるのに、故人と関係のなかった人が、その故人の死者AIを冒涜だと批判できるのかなど、法の権利や規制が整備されておりません。法学も専門外ですので、佐藤啓介先生の先行研究を参考にさせていただきます。佐藤先生には、死者の倫理について押さえておくべき点をまとめてくださった論文があります。その論文の挙げる問題点のひとつに、死者の像と異なるAIがあります。美空ひばりさんの死者AIは、歌声はよかったけれども、外見の再現性が低かったため、批判が生じてしまったことになります。

また、死者AIは特定のデータに基づいているため、生きている人間に都合がよい形で蘇らせることも問題点として挙げられています。そもそも死んでしまっている人の再現なのですから、人工的で虚構的です。今生きていない人を今生きているような形で蘇らせるのはおかしいというわけです。こちらの論文を参考に、どうやって死者の倫理の問題を考えていけばいいのかを深められるのではないかと思います。

最後の質問なのですが、デジタル化がもたらす人間への影響について、私は最近興味をもっておりますので、死者の生死の境の曖昧化についてご意見をうかがいたいです。死者と交流可能になることで、まず社会にどのような変化が生まれるとお考えになりますでしょうか。私の専門はイスラム神秘主義になりますが、イスラム神秘主義のテキストを読むと、死者との会話が普通のこととして受け入れられています。死んでしまった聖者のお墓に行って話しかけたら、墓の下から返事が返ってくるといった具合です。大学の授業などで紹介したりすると、現在の私たちにとって非科学的なので。みんながクスっと笑うところです。しかし、死者AIが一般化したら、死者と会話をする話を読んでも当たり前のこととして受け流す世代が出てくるのではないかと思います。死者に問いかけたら死者が答えることが当たり前の社会になる。そうすると、私たちが神秘主義だと分類していたテキストが、非科学的

だと思われていたテキストが、普通のテキストとして扱われることになります。史実として受け止められるかもしれません。死者との会話が科学で実現できる社会において、神秘主義のテキストをどうやって読んでいくのか。今とは異なる読み方のできる社会になるのではないのかと、私は思っています。

デジタル化は0と1の離散ということで、レコードからCDになったときに、耳のよい方はレコードのほうがよかったなどと感想をもったそうです。今までアナログで、連続で記録していた情報から、そぎ落とされた何かがある。デジタル化の過程で抜け落ちてしまう情報が、死者AIや生成AIなどにもあるとのではないかと思います。デジタルなものが浸透していく中で、私たちにどのような影響があるのか、お二人にお聞きしてみたいです。



小原：これから議論すべき、いろいろな点を投げかけてくださったかなと思います。いくつかやはり興味深い事例をあげてくださいました。イスラム圏における事例というのは、私たちそれほどなじみがあるわけではありませんので、日本社会の現状を相対化する上では非常に大事ではないかなと思いました。どうしても私たちは日本の中だけ見ていると、日本特殊論みたいなものに傾きがちですけれども、意外と似たようなことがイスラム圏でも既に行われている点は、大事な視点だと思います。

それから師先生の説明、プレゼンの中でも紹介があった高台寺のアンドロイド観音マインダーです。これは私たち一緒に宗教学会のワークショップでやったときに、高台寺のご住職にも加わっていただいて、実際の制作秘話みたいなところもお話をいただきました。師先生のお話の中では、AIは衆生か、AIは生きたようなものと見なし得るのか、といった問いがありました。観音菩薩はどう位置付けられるのか、複雑なところですが、高台寺の説明によると、観音菩薩はどの時代であっても、お姿を自在に変えながら衆生の救いのために現れてくれます。現代においては、アンドロイドとしてお姿を現されたのだという説明をされていて、それはそれで納得のいく説明です。アンドロイド観音マインダーをつくられたのは、阪大の石黒先生です。石黒先生からもアンドロイド観音マインダーの制作秘話みたいなものを聞いたことがあるのですが、やはり現在のアンドロイド技術の最先端のものと、昔からある観音菩薩に対する信仰などが融合した姿を私たちは見ることができますので、AIという狭いところだけで議論を閉じるのではなくて、AIを実装したロボットやアンドロイドが、私たちの実生活に入り込んでくるような時代の中で、それとどう向き合っていったらいいのかということも、問いになるかと思います。

それでは、いろいろ議論すべき点はあるとは思うのですが、まずは石田先生が投げかけられた大きな二つの問いに対して、お二人の講演者にそれぞれ答えていただくところから議論をはじめたいと思います。まず一点目なのですが、日本人とロボットの親和性というものは、いわゆる日本特有のものなのかどうかというところです。そういう指摘は、これまでも内外であったと思うのですけれども、それを本当にそのようなものとして受け止めていいのかどうか、この点について、まず才脇先生、お答えいただけますか。

才脇：ありがとうございます。もう本当にたくさんの問いかけをいただきまして、また師先生の講演もそうですが、学びもさせていただいて、非常に楽しい有意義な研究会になったなと思っております。今の日本に特有かというような部分なのですが、まず事実としてなのですが、先ほど石田先生なども少し触れられておられましたように、実はムスリム圏からの留学生、石黒研に関してなのですが、我々のところの研究室に結構来ている感じです。それと、あと女性も興味を持って来ている人が結構いるのです。それから欧米一般のヨーロッパ諸国、アメリカも含めてなのですが、そう

いうところからも比較的来られているので、結構世代による差というのも大きいかなと思いました。つまり、社会規範になっている文化、例えばキリスト教の文化などがそういった人間らしきものを人間がつくることに対する忌避感みたいなものが心の底にあったとして、親世代、おじいちゃんおばあちゃん世代の方は、そういった文化の中で大きくなってこられて、そもそも自分たちにとって存在しなかったものなので、あまり興味も持てないし、何それという感じかもしれないのです。けれども、今の若い世代の人たちは、例えばジャパニメーションや映画などを通じて、そういったものに比較的親和性を持ってきているという人たちが多いので、それもその人の好みや趣味にもよるところはあると思いますし地域差もあるとは思うのですけれども、文化としてそういったメディアとどれぐらい触れてきたか、そしてあとは世代がどの世代かということにもかなり影響があるかなというのが、私の実感です。

小原：師先生、いかがでしょうか。

師：ありがとうございます。ロボットに対する親和性は日本特有なのかということについては、先ほど呉羽真さんの論文（「日本人とロボット：テクノアニミズム論への批判」）もご紹介されていました。まず、AIなど関係なく、日本仏教などを研究している者の立場から歴史的な話をしたいと思いますが、確かに日本仏教の中で、草木成仏説のような非生物にも生き物と同じような心がある、という考え方が発達したということは間違いないので、そういう意味ではAIを生き物とみなすような土壌が日本仏教の中にあったといえなくはないのだろうなとは思います。

それを踏まえて、例えば梅原猛先生は「山川草木国土悉皆成仏」などと述べ、そういった思想が日本の縄文時代のアニミズムなどと結びついているのだというような議論をされました。ただ、草木成仏の研究の中でいわれていることなのですが、草木成仏というのは我々人間と草木との平等性を強調する側面も当然あるのですが、一方で日本の文化の中で、例えば森の木を切ったり、あるいは動物を殺して食べたり、そういう自然破壊に対して負い目みたいなのを感じた日本人が、負い目を解消するためにつくった教義であるというような指摘もあります。つまり、アニミズムともいわれる草木成仏説は、自然を搾取するための理論であるという側面もあるのです。

また、島薗先生のご論文（「日本人論と宗教：国際化と日本人の国民的アイデンティティ」『東京大学宗教学年報』一三、一九九六年）などにも、梅原猛先生が一九八〇年代のバブルの頃にこれを盛んに言ったというのは、アニミズムや縄文重視などの日本文化論が、バブル経済を背景とした経済的優位に基づく優越意識みたいなものを正当化するために使われた側面もある、というようなことも仰っていて、日本人とAI・ロボットは親和的かどうかという言説自体が――「親和的」の捉え方にもよりますが――歴史の

中では必ずしも成り立たない可能性もあるということは指摘しておきたいと思います。これが、歴史的な研究をしている人間としてのコメントです。

ただ一方で、先ほども言いましたが、史実ではないから駄目なのか、バブル時代につくられた「伝統」だから駄目なのか――呉羽先生の論文でもホブズボウムの『創られた伝統』が引かれていますが――という議論はすべきだと思うのです。先ほども言いましたけれども、社会的な問題の解決のために過去を語る、というようなことを肯定するような立場もあり得ると思うので、やはりそういう語り／騙りというものが持っているプラス・マイナスの面というのは、両方評価すべきなのかなとは思っています。

才脇：ありがとうございます。今、師先生のお話をうかがって、バブル経済時代のナショナリズム的な側面があるのではないかというお話をいただいて、なるほどと思いながらうかがっていたのです。その話をうかがいながら、今、そうだと思って少し気づいたことがあります。といいますのは、バブル経済が盛んだった頃といいますか、日本が非常に経済一流だといわれて、ものづくり大国日本、ジャパン・アズ・ナンバーワンといわれた頃です。この頃これを支えていた、製造を支えていた最大の技術が、ロボット技術なのです。製造工程で大胆にロボットを導入して大量生産を行うことで、それを世界中に輸出するような技術がどんどん発展していった。だから、日本はロボット大国だということが、その頃盛んにいわれておりました。実はこれはフェイクではなくて事実そうだったのです。それが一つの自信になって、我々の国はロボットが得意なのだ。それからロボットアニメーションなどもたくさんつくって、みんなロボットに親和性が高くなっているのだみたいな、先ほどの先生の言葉を借りますと、つくられた言説の部分と、そして事実の部分と、これが複雑にないまぜになって、日本はロボットに先端的な国なのだ、親和性の高い国なのだという言説が、みんなに一般化していたというのはあるかなと思います。

それともう一つ、それに関連してなのですが、先ほどの死者の話もそうなのですけれども、実は個々人が楽しみとしてやっている分には、別にそれでなんにも構わないわけです。ところが、それを社会に対してこれが自分たちの正義なのだ、自分たちの感情をもろにぶつけるようなソーシャルネットワークみたいなものや、あるいは一般のメディアなどがそういったものを取り上げるようになると、この問題が少し違ってくる部分があります。AIとそういったいろいろなトラブルが起こるというような問題の部分には、AI自体が抱えている問題も、人間の社会が抱えている問題もありますけれども、それ以外にそれが社会にどういうふうに出ていくのかという出口の部分の問題を分けては語れないと思うのです。そこは、結構シビアなところがいろいろあると思うので、きちんと議論をしていかないといけない部分だなと思います。AIだからそうなのか、あるいは今のメディア技術、あるいは個人の情報を拡散する技術がこうだからそうなのかみたいなところですね。そ

れは先ほどの先生のおっしゃっていたロボット日本得意論というのが、どうして出来上がってくるのかというところにも密接に関わっているかなという感じがいたします。

小原：今のテーマだけでも、何時間も議論できそうな深みを感じます。師先生が言われたように、確かにこの問いを立てるときには、ロボットとの親和性というのにすぐにいく前に我々と無生物との関係が歴史上どうであったのかという点を考える必要がありそうです。そしてロボットとの親和性については、今、才脇先生のご指摘もあったように、高度経済成長期のロボット技術に対する信仰に近いようなものがありました。あるいは鉄腕アトムやドラえもんなど、その他多種多様なロボットと人間とが比較的親密な関係を取り結ぶアニメーションなどの物語の中で醸成されてきたものがあります。サブカルチャーの中で築かれ今に続く親和性と、それ以前にある長い歴史の中にあった無生物と人間との関係は一旦分けたほうが正確な議論ができるだろうということを、今改めて思いました。

石田先生、一旦これは、今のような感じでいいですか。もう一つ問いがありましたので、そちらに対してもお二人にお答えいただきたいと思います。RAGの技術は本当の解決策になるのかということです。いろいろな有象無象の真偽不明な情報が溢れているようなネット空間では、その情報も信ぴょう性に欠けると。しかし、きちんと限定されたRAGから情報を得た場合には、一つの解決策になるのだろうかという問いが投げかけられましたので、改めてお二人にお聞きしたいと思います。才脇先生からお願いいたします。

才脇：これも、非常にお答えするのが難しい問題かなとは思うのです。実はRAGも含めまして、技術の世界ではとにかく一つ何かアイディアが出る、新しい技術が出ると必ずそれはパーフェクトではありませんので、その問題をどう解決するのかというところで、また次の提案をする。さらに次の提案という形で技術が進化して

いくところはあるとは思うのです。RAGに関しましては、今ご説明ありましたように、知識の範囲をきちんとした範囲に限ることで、限りなく正解に近いもの。つまり百科事典的なところから取ってくれれば、トラブルは少ないではないかという話はそうなのですけれども、実はそうだとしても百科事典自身がどれぐらいパーフェクトなのか、実はそこでさらに考えないと答え出ない部分もあるではないか、あるいは年代によって解釈がどんどん変わっていく部分がある、あるいは新しい発見で追加しなければなどというのがあって、これは死んだデータベースでは、次々と新しくアップトゥデートできなければ、うまく機能しないです。その部分を誰が監修するのか、誰がその部分を新たな技術でより検索などの精度を上げるようにするのかといったところが問題になります。今、私が技術系からお答えできる話としましては、確かに従来の、なんでもいいからネット空間から取ってこようというのに比べれば精度は高いかもしれませんし、ある程度信ぴょう性も高いかもしれないので、そういう使い方をわかって使う分には優れているかもしれない。だけれども、それがパーフェクトとはいえないので、妄信することは危険だというのが、今の現実的な答えかなという気がします。

　そこでまた、こんな問題があるということを、実際使われている人文系の方などからご指摘いただいて、技術系はどうすればその答えに、その要請に応えられるのだろうという、そこを考えることが研究テーマになるので、そういう意味では、これは車の両輪だなと思っています。さっきの師先生のお話もそうなのですが、師先生のお話と、私のさせていただいた技術系の話とは、お話をうかがっていて矛盾するとは全く思いませんでした。全く相互的な関係にあって、実はなかなか相互性というの確認できる機会がないなと。今日みたいな機会の提供をいただけることで、なるほどこういうふうな問題を少し考えないといけないよねというのが、相互に認識できることが、すごく貴重な機会だなと思ったので、本当はもっと多くの研究者の人に、こういった機会に勉強してもらえたらなというのが、正直なところです。ありがとうございます。

師：ありがとうございます。この問題に関しまして、まず私が考えるのは、京大がつくっているブッダボットの意義というのは、まさに仏教学者や仏教者が学習をさせているというところだと思っています。ブッダボットはたぶんいろいろな意義があるとは思うのですけれども、良質な学習――何を「良質」とするかは、また議論があるところでしょうが――をきちんとさせるということを真面目にやっているというところが、意義深いのだろうと思います。

あとは、もうほとんど才脇先生とほとんど同じ答えになってしまいます。今後そういうことをどうやって議論していくべきか、どうやって議論のプラットフォームをつくっていくのか、というのは、かなり重要で、いろいろなやり方があると思います。学者だけでなく、学者ではない人、一般の方が入るようなやり方。あるいは、学者の中でも工学系の先生や、技術者の方と、倫理的な問題を語れるような人文系の学者が議論するなど、いろいろなやり方があると思うのですけれども、こういう場をいかにつくっていくかというのは、今後かなり重要になってくるのだろうなと思います。誰が決めていくかというのは、たぶん答えられないとは思うのですけれども、「概ねこれは我々人類にとって妥当であろう」というような解釈みたいなものを学習させるためにリソースを突っ込んでいかないと、どんどんどんどん悪くなっていくと思うので、それは努力としてはやっていかなければいけないのだろうなと思っています。

小原：ありがとうございました。RAGが決して解決を導くわけではないという点は、理解できたのではないかと思います。もうしばらく登壇者の間で議論したいのですが、才脇先生にまずお聞きしたいと思います。今日はかなり技術者の視点からご発表いただいたのですが、神道の世界に身を置くものとして、神道の世界観と、今、才脇先生が研究されている領域との関係というところを少し深掘りしてほしいのです。どうでしょうか。

才脇：これは先ほど質問にあがっていた例ではあるのですが、高台寺のアンドロイド観音の話あります。僕の後輩の小川くんがつくっているやつなのです。それで小川くんは、僕が自分の家で神職としてのお祓いや祝詞奏上などするのを見学しに来てくれまして、「こないだはロボット観音つくったから、次はロボット神職つくろうかなと思って」みたいなことを言っていましたけれども、結局まだできていないので何が違うのだろうなどと思いながら、たぶん表現したいものが違うのかななど思ったりしながら、彼がどういう取組をするかというのを興味深く楽しみに見ているのです。

やはり僕が思いますのは、神道をどう捉えるかというのもあります。もちろん教義などをものすごく難しく理論として考えていくという立場もありますし、あるいは自然として捉える、あるいは地域社会の鎮守として捉えるなど、様々な側面あると思うので

す。一つ言えることは、やはり神職としての仕事をしているときに、今のロボット、あるいはアンドロイドの技術は、この雰囲気は全部捉えきれていない。人間は様々なこと感じています。例えば自分が参拝しているときに、老人のすごい年配のベテランの神職の方が祝詞をあげてくださったら、それだけでありがたい感じがする。あるいは、林の木立の中で小さくても、そういうお宮さんがあるところにお参りに行ったときに、すごく神聖で荘厳な感じがする。それは、別に理系のロボットつくる研究者、AIの研究者など関係なく、直感的に自分が感じるものなのです。先ほど、師先生の話でいきますと、生命ではないかもしれないけれども、なんとなく生命らしきものというのを、小型なロボットなどでも感じたりします。実はロボットをつくるということと何かにそういった人間性などを感じるというところは、先ほどの話ではないですが、お互い車の両輪でもありますし、実は一体化している部分でもあり、また離れている部分でもありと、複雑な関係があると思うのです。

そういう意味では、今、神職が表現しているもの、神道が一般の参拝の方々に対して与えている様々な影響みたいなものとロボットとの間には、まだまだ大きな乖離があって、距離もあって、ロボットはそれらしきものではありますけれども、神職が体現しているすべてを人に対して与えられるようなものではないと感じていますので、そこの部分ではかなり区別して対応しているというのが、今の段階なのです。いろいろいわれる方はおられます。ロボットで神職させたら面白いのではないか。あるいは、おみくじをネットで引いてもいいのではないかなどとおっしゃるのですけれども、神職としてはそういうものではないと。それは、そういうものではなくて人間が人に対して、そういう空間の中で与えるお互いの相互関係みたいな中で存在しているものであって、機械にそれを置き換えて誰かにやらせたらいいのだみたいな、その時点でそれは少し違うものになっている。形式とあれは違うのだというところですね。しかし、人によってはそういうものを求める方もいらっしゃるかもしれませんし、さっきの話ではないですが、小型ロボットに生命を感じる人がいてもおかしくはないよねと。それは実はつくり手側は全く意図していない部分でもあるのです。さっきの石黒さんの話でもそうなのですが、実はロボットやアンドロイドなどのつくり手、あるいはAIのつくり手というのは、割と無邪気なところがありまして、漫画や映画の原作者と同じようなものだなと僕は思うことがあるのです。自分が面白い、楽しい、こんなことできたらいいなという夢を自分の持てる技術で漫画家だったら絵を描きますし、小説家は小説書きますし、同じようにプログラム組んだりなどするわけなのです。しかし、プログラムつくる立場で見てみると、このコードをいくらつくっても、ここに人間は存在しないな。あるいはニューラルネットでいくらしても、ニューラルネットの中に我々の知性は入ってないよなみたいな。つまり、僕らはまだ全然自分たちの意識や意図、知性がどういうふうに脳の中でもコーディングされているか自体もわかっていな

い状況なのです。

僕がロンドン大学の脳認知発達研究所のところにいたときに、たくさん、いろいろな最新の技術を使って脳を分析しろという話で関わっていたのですけれど、どんだけやっても人間らしさ、人間の気持ちがどこから現れてくるのか、どんなふうにコーディングされているのか全くわからなかったのです。現象としてこんなふうに入力があったらこう応答するなというのはわかるのですけれども、そのモデルの中には人間の心はないって常に思っていました。したがって、神道自身は心を大事にして、心を問題にするところが大事なことなので、ロボットやアンドロイドの話とは少し切り分けないといけないなって、まだ、今、そういう段階だなと思っているというところです。

小原：ありがとうございました。先ほどご説明の中で、石黒先生の考え方に対してのご見解もあったのですが、石黒先生は、今、人間が抱えている限界性や有限性というものは、我々が有機的な生命であるからだとお考えです。しかし、将来、例えばマインドアップローディングみたいなことができて、人間が無機質な体を持って永遠に生きられるようになれば、それこそが究極の進化なのではないかというご提案をされていると思います。このような将来の見立てに対して、才脇先生はどうお考えになりますか。

才脇：僕は否定的です。一言で言ってしまったら、いやそんな深みのない議論したら申し訳ないのですけれども、なぜそう思うかなど、いろいろ議論すべき点はたくさんあると思うのです。しかし、今自分たちが想像している、期待している、ほしいと思っている人としてのあり方、人としてこういうふうに生きたい、幸せはどんなものだ。あるいは宗教との関わり、そういったものはそういう完全にアップローディングできるようなものの中には、今の技術では少なくともない。先ほど申し上げましたのに人間の意識がどういうふうに脳の中でコーディングされているのか、あるいは脳の中だけでは収まらないのか、体、身体性が必要という方もおられますし、あるいはもっと他のものがあるのか、そんなことすらわからない状態で、我々の意識は全部アップローディングできる

のだということ自身が不遜ではないのかなというのが、自分の正直な気持ちなのです。

もちろん、あらゆるそういった部分が解明され、わかって、自分たちってどんなものなのだというのがわかったら、そういう議論も実を結ぶかもしれないのですけれども、今のいわば問題の範囲がはっきりしていない状況で、そういったことを議論はできないだろうなというのが、正直な自分の思いではあるのです。そうするとどういう話になるかというと、さっきのそれこそ師先生の話ではないですが、現象として、つくり手側はあまり無邪気につくっていて、いろいろなサービスといいますか、いろいろな楽しいことを社会に対して提供しているだけかもしれないけれども、それによって受け手側である個人や社会などがどんなふうにそれを捉え、反応し、それがまた影響を与えていくかという部分を議論し、考えるということが重要だというところに落ち着くのではないかなと。つくる側は無邪気に一生懸命つくって、それのよし悪しも含めて社会に対する影響を、そういう専門家の人と議論していく。こういうことの積み重ねが、今の現状ではないかなと思います。

小原：ありがとうございました。ここは技術と宗教との接点の部分でもありますので、後ほど、フロアの方からご意見ありましたらいただきたいところであります。次の論点に移りたいと思います。AIそのものをどう扱うかということも大事なのですが、私たちが意識せずとも、もうその一部になっているのが資本主義社会であり、またそれを現在において駆動させているものとして、師先生が言われたようにアテンションエコノミーがあります。これは、おそらくここにいる誰もが意識するとせずとに関わらず、すでに引き込まれているものです。つまり、私たちが、例えばYouTubeを見たり、Amazonや楽天でものを買ったりする中で、視聴履歴や購買履歴とビックデータとが組み合わされて、AIが「あなたはこんなもの見たのだから、こんなもの買ったのだから、これも絶対好きなはずです」という形でレコメンドしてくれます。私たちのアテンションそのものが、つまりページビューやクリックしたという行為が交換財として資本主義を、今、駆動させているわけです。その際、我々は何も損はしていないと思っているのですけれども、我々にアテンション自体が交換財として使われているということです。このような仕組みが、私たちの日常生活の見えない中核に既に置かれていると思うのですけれども、これとどう向き合うかという課題があります。

師先生は、佐々木閑先生のネットカルマなども取り上げて、ネット上におけるカルマの問題を取り上げてくださいました。個人が頑張ってそこから脱出するというのは一つの方法かもしれませんが、それだけだと今のネット社会、アテンションエコノミーの前

提となっているものを、なんら変えることができないと思うのです。この問題は、師先生自身がご自身の専門としてあげてくださった仏教倫理にも関係があると思います。従来の仏教が個人の救済に関心を向けてきたことに対して、仏教倫理という新しい言葉を考えるときには、社会に対して何がいえるのか、社会の変化のために何ができるのかという問いが、そこにあると思うのです。そういうことを考えると、アテンションエコノミーを含む、我々の大前提となっている社会や日常生活に対し、仏教倫理の視点からどのようなことが提言できるのか。これは、すごく大きな質問で申し訳ないのですけれども、この点について、師先生のお考えをお聞かせいただけますか。

師：大変重要で、かつ答えにくい質問をありがとうございます。まさにその通りで、例えば人権や自由意思といったものは、非ヨーロッパ的な社会に生きていたとしても、非常になじみの深い概念になっていると思います。今の若い人たちに対して「平等ではないほうがいいよね」などと言ったら、「えっ、何言ってるの、この人」みたいな反応になると思いますし、あるいは、学校教育などで行われている人権教育みたいなものを否定するようなことを言うと、「すごく〝やばい〟人」みたいな感じで言われると思います。

そういう意味では非常に広く共有されている概念ではありますが、一方で人権概念などは、「尊厳」のようなヨーロッパで発達した様々な概念を基盤としてできあがっています。ですから、例えば仏教のように、そもそも個人の自由意思というのを前提としない考え方をベースにするならば、「尊厳」や「人権」ってそもそも成り立つのですかという議論があり得ると思うのです。これはアテンションエコノミーに対して、どうやって我々が我々の権利や自由などを守っていくのか、という議論にもつながってくることです。私、実はここのところずっと「仏教によって人権などを基礎づけることは可能か」みたいなことを考えているのですが、結構難しいなと思っております。逆に言えば、尊厳をはじめ、今、我々が共有している人権を成り立たせている概念は、よくできているなと思ったりもするのです。仏教倫理的に得意な分野と不得意な分野があると思うのですが、特に今、インターネットやアテンションエコノミーなど広がる社会の中で、搾取や差別などをなくすための理論的な基礎付けというのを、仏教的な考え方からやるというのは、結構難しいなとは思っています。仏教倫理的な観点からいえることはたくさんあると思うのですが、その一方で今、私たちが共有している人権概念みたいなものも使っていきながら、しばらくはその両輪で議論していくしかないのかなというのが、実は正直なところです。今、小原先生がおっしゃったように、仏教は個人が苦しみから脱出するみたいなところからスタートしているので、社会的な苦しみをどう解決するかというのは、なかなか理論化が難しいな、というのが正直なところです。

小原：ありがとうございました。後半でお話いただいた両輪のように考えていくということがまずは大事だと思います。我々は西洋由来の概念に対しては、少し慎重に考えて、西洋即普遍的ではないという点を確認する必要があります。だからといって、例えば仏教だけ、あるいは他の宗教だけで成り立つような閉じた倫理空間をつくっても、これでは機能しなくなりますので、まさにコルモスがこれまで追求してきたように、様々な宗教が共に知恵を出し合って、境界線を越えて現代の課題に向き合っていくことを共に探求していくことができればと、今のお話を聞いて思いました。

登壇者の間でまだまだ議論できそうなのですけれども、フロアの方々もご講演に対して、あるいは今のディスカッションについても、いろいろご意見あるのではないかなと思いますので、残り時間はフロアからのご質問をお受けしたいと思います。マイクを回しますので、挙手をしていただき、私がどうぞと言いましたら、マイクを持ってお話ください。差支えがなければご所属やお名前述べていただければと思います。いかがでしょうか。

弓山：東京科学大学、弓山と申します。科学とはあまり関係ない専門ですけれども。師先生にお聞きしたいのですが、最後のほうで違和感を大切にしたいということをおっしゃられて、その前に遺影とAI死者は何が違うのか、延長線上かもしれないということをお

っしゃられたかと思うのです。師先生自体はAI死者に違和感を覚えられているのか。覚えられているとするのだったら、どこが遺影と違うのかというお考えなのか、お聞かせいただければと思います。遺影といっても時々お葬式に行くと、我々もこの遺影変だなというのもあります。または死者結婚のお写真などを見ると、たぶん私もそうですし、若い学生さんなどはすごく怖いというふうに言うのです。だから、遺影といってもそれほど受け入れられているわけでもないかと思うのです。そのあたり、どういうふうに遺影とAI死者を分けられているのか、分けられていないのか、お聞かせいただければと思います。

師：ご質問ありがとうございます。私が思う遺影と、AIによる死者の再現との違いは、見る側の想像力がAIを使ってしまうとすごく減ってしまうのではないかというところです。先生が例に挙げられた、明らかに変な遺影の写真や、死者の結婚の写真などを怖いと思うのは、まさにそうなのだと思います。しかしあれは、外部の人が見るから変に見えたり、怖く見えたりする面があって、明らかに遺影にふさわしくない自動車免許の写真が遺影に使われていたとしても、家族の方が見ると様々なコンテキストや、様々な思い出によって補完されて、きちんと遺影として機能するのではないかと思うのです。家族であっても変だと思うこともあるかもしれないですが、やはり外部の人が見るのと、ご遺族の方が見るのでは、大きく異なると思います。親しい方であれば、やはりそこに大量の想像の余地というか、補完機能みたいなのが働いて、見え方が変わるのではないかと思います。おそらく亡くなった方の結婚写真を見ても、他の人が見たら「なんだこれ」と思うかもしれないですが、親しい方が見るとすごくうれしく見えたりするというような部分があると思うのです。

一方でAIは饒舌ですので、いろいろな話しゃべってくれたりします。もしかすると、外部の人から見れば、「ああ、こんなことしゃべりそう」といった感じで違和感はないかもしれません。しかし、そういうものがなくても頭の中で再現できてしまう人にとっては、むしろAIと自分のなかの故人とのあいだにずれが生じて、違和感を感じるみたいなところがあるかもしれない、と思っています。ぱっと思いつくところでは、そんなところです。

弓山：情報量が少ないからこそ、そこを埋める想像力が違和感を低減させるということなのでしょうか。どうもありがとうございました。

小田：小田と申します。元関西大学におりました。私もイスラムはイスラムなのですが、デジタルなどの関係は全然知らなくて。私は二〇〇〇年ぐらいだったのですが、阪大に来ていたトルコ人だったけれども、落語をやっていまして、落語で幽霊話が日本ではあると。だけれども、トルコではやはり幽霊の話はしにくいのだと言っていたことがあったから、先ほどあったみたいに時代が変わって、そういう画像化されたものに、今の世代の人たちが抵抗な

くしていったのかなというのは、一つ感じました。

今日のお話全般に関わることなのですが、写真とAI画像と何が違うのか。今もその話が出ましたが、私自身宗教というものをずっと考えてきて、像ができてくる、画像。最初におっしゃいました、画像から彫像ができてくるのとできない宗教とがある。だけれども、私はまさに難しい超越者というものを感性で見てわかる、そのことの大事さ。宗教というのは基本的にやはり哲学と違うところで、知識だけではない。もう子どものときから神様などにして接していく感覚でわかることの大事さ。だから、一回できたら、いや超越はイコノクラスムが出てくるように、画像ではないのだと一切のものを超えているのだという絶えず対立を持ちながら、一旦画像ができたら拒めないというところがあったと思うのです。

イスラムに関しては、私は、画像は頑なに拒みますけれども、クルアーンの朗唱があるように、ビジュアルではなくてオーディオなのです。耳で感覚的にアッラーが語りかけてくる。その声が見る代わりに、声の文化でイスラムはオーディオのほうで、感覚的に神の実在性みたいなものを訴えてくると思う。だから、そういう感覚ということの大事さというのは、ずっと考えてきた人間なのです。

ただそこから、今日のAI画像への連続性を言われたときに、やはり私もすごく違和感を感じて、先ほどちょうど話題になっていた死者の問題にしても、写真とAI画像が、どこが違うかといったときに、やはり個人的な範囲にとどまるか、より公的な空間に出てしまうか、そのコンテキストが誰にも、一応誰が接してもいいような画像になってしまったとき、全然意味を違って、先ほど言われたように、まさにそうだと思うのです。死者の問題というのは、幽霊ででも会いたいという、非常にそれは親しい間柄で、少なくとも故人一人の場合ももちろんそうですし、少なくともその故人を知り合っている人同士で、「そうよね、会いたいよね」というようなことが言い合えるコンテキストを共有している間の中での話の死者と、死者の像がAI画像になったとき、何が違和感なのかといったら、誰も知らない人でも見てしまえる。しかもそれがたちの悪いことに、人間のように、生き物のようにといわれたけれども、そのリアリティーを獲得してしまったことのすごい違和感だと思います。

ただ、今日の話を全般で聞いていてつくづく思うのは、知識の確かさみたいなものをどこに求めるかということの難しさで、最後にRAGだったらいいのか。だけれども百科事典だって確かではないぞと。この問題はある意味で宗教とすごい親和性があって、宗教も非合理なのです、神の言葉というのは。それがどうやって獲得されていくかというのは、私はやはり、これはそれを信じる人たちの共同体の人たちが信頼していく。その人たちが続いていくという、そこにしか宗教の真理性というのは、原理主義の人はもう聖書があるのだと言ってしまうけれども、いやいや、聖書そのものが既に信頼感の中で出来上がっていく、そういう長いプロセス、共同体の人々の承認みたいなもので、宗教の知の確かさみたいな

ものが伝統によって補完されてきたとしたら、今のAIの問題というのは科学技術であるということで獲得する確かさの部分というのが、一方ではあると思うのです。

だけれども、それが承認されるかどうかの問題というのは、死者の問題や宗教的なブッダボットみたいなものが出たときにも違和感が出てくるのは、そのあたりではないかと。だから、伝統的に宗教が獲得してきた宗教の伝統というか、確かさみたいなものと、今、AIがそこへ付与されていくことによって、それが承認されるかどうかというのは、共同体も何もない、仏教徒でもない、どの人にでも公表されることの違和感というか、その辺にあるような気が。だけれども、ものすごくたくさんの考えなければいけない課題を与えられて、本当に今日のお話には感謝いたします。あまりコメントにもならないですけれども、少しそれだけ考えたことを述べさせていただきました。

小原：ありがとうございました。もしリプライがあれば。

才脇：ありがとうございます。今ご指摘いただいたことは、本当に自分もそういう問題ってあるよなと思いながらうかがっていました。先ほどの東京科学大学の先生の話もそうなのですが、僕の分野、いろいろな名前の呼び方あるのですけれども、ある一つの呼び方はヒューマンインタフェースといわれる分野なのです。あと、人間と機械、人間がどういうふうにお互い対話したり、コミュニケーションしたり、インタラクションするのかと、そこの技術を考えよう。そのときにいつも問題になりますのが、サービス過剰技術の問題なのです。つまり、人により優しく、より便利に、より新しい技術をというふうに、よりよりもっともっとといって、次から次へと新しいものを付加して、進化していくような。そこで論文書ける人がたくさん出てくるみたいな、そんなことが、かえっていろいろなところを駄目にしている部分や、本質を見誤らせる部分があるではないかという話です。

さっきのAIの遺影の話にしましても、写真だけだったら、あるいは写真すらなくて位牌だけだったら、恐らくなのですが、自己

の中での対話というのがあると思うのです。自分のイメージしている亡くなった方との対話、あるいは神様との対話、あるいは死者との対話など、そういう自分の心の中で祈りの形を取りながら、いろいろなことを考える。ところが、全て外側から与えられるのです。イメージが全て外在化されていく。それによって本来でしたら本人自身が悩み考え、あるいは感じたりするべき祈りの場であるものがそうでなくなって、一つのお祭りではないですけれども、全て、しかも外在化されるものが本当にその人が心の中で考えていることだからまだいいのですけれども、そんなことわからないので、マジョリティーとしてこうではないですかという、「このあたりが落としどころですよね」みたいな当たり障りのない回答。あるいは当たり障りなかったらまだいいのですけれども、ひょっとすると琴線に触れたり、いやそれは違うだろうという話が過剰に付加されたりする。これは、もう技術としてヒューマンインタフェースの世界で常に問題視される中心的なテーマの一つではあるのです。つくる側というか、研究する側はとにかく新しいことをできればというので、どんどんどんどん、そこの部分はあまり頭の中で考えないようにして、論文を書いていることが多いと思うのですけれども、こういったシンポジウムもそうですし、あるいは一遍自分たちでヒューマンインタフェースの今後のあり方を考えてみようみたいな話のときには、必ずそのお話が問題になっていると思います。そういう意味では、今日もお話があがっていて思ったのは、こういう話をヒューマンインタフェースでやっている研究者や、人間情報学をやっている先生方と一緒に議論できる場があったら、本当にいいのになと思いました。どうもありがとうございました。

小田：今の話が一番わかりやすいのは、私たちが文学や漫画でもそうですけれども、漫画で見ている文学で読んでいるときに、それがドラマ化されて、実写化されたときに違和感を持つ人は多いではないですか。自分のキャラクターはこうなのに、少し余計だな、この俳優にやられたのではという、それが一番わかりやすい例だと思いました。少し、そのことを思いついたのです。

三宅：ありがとうございます。金光教の三宅です。非常に今日はいいお話をうかがいました。結局、今のAIは、やはり大規模言語モデルから知識を得て、ディープラーニングはいくらでも知識を得るわけです。結局、文字化された、言語化された情報の多いやつは勝ちなのです。より多くの影響を実態以上に与えてしまっている。だから、言語でいえば英語です。だから、先ほど聞いて驚いたのですけれども、サウジのロボットがソフィアで、イランのロボットがアリスと、英語やんかと。そこを、もっとイスラムみたいな名前つけへんのかと思ったのです。それはなぜかというと、大規模言語モデルがそうなっているから。そうだとすると言語化されないもの、言語化できにくいものを、どういうふうにしてAIが習得するのか。先ほど、才脇先生がおっしゃったように神道が弱いのは、

仏教やキリスト教はなんたってテキストが二〇〇〇年分とものすごいあるわけですよね。その点神道は、圧倒的にそれは少ないから、やはりAIのところで難しいと思うのです。そうすると言語化できないものを、私はこの場合は身体性、先ほどの写真はいいけれども、AIは不気味だと思うのは、やはり身体性をどこまで求めるかということなのです。三人の先生方に、AIと身体性との関係について、短くでいいですから教えていただけたらありがたいです。

小原：時間があまりないので、今のご質問に対して短くお答えいただけますか。その後オンラインからも質問がきていますので、オンラインからの質問も紹介したいと思います。才脇先生からお願いいたします。AIと身体性について。

才脇：AIと身体性の問題は、非常に重要な観点だと思います。今、AIに身体性はほとんどないといっても過言ではないという状況だと思います。しかも実体のあるロボット、あるいは人が扱うインターフェースというのを考えているときには、必ずそういったものがあることが重要になってくると思いますので、これはその次の研究のステップとして組まれてくるべきことかなと思います。ただ、身体性を獲得していく上で何が必要なのかというのは、まだ十分わかっていない部分もたくさんあるのです。センサーが発達すればいいのか。しかし、実は先ほどの高台寺のアンドロイドも、人間らしいふるまいをさせたいという思いはあって、プログラムを一生懸命組むみたいですけれども、しかし自分たちの思う動きなどを表現できるレベルにはまだまだいたってないのです。そういう意味では世間が思っている状況や期待と、実際つくっている側との大きな乖離があるのも事実です。だから、まだまだ身体性を獲得する、身体性を扱ったシステムをつくれるというところにいくのには、ずいぶんと時間かかってくるとは思います。

師：非常に重要な問いをいただきまして、ありがとうございます。私のお答えの一つとしては、身体に関する捉え方は、おそらく宗教や、思想、哲学、文化によって違うので、まずそこをすごく議論していくのが重要だということです。あと、「身体」という概念は、もちろんアジアの伝統の中でも普通に使われる言葉ですが、身体を精神などと対立させて考えるという発想自体が、もしかするとヨーロッパ的な考えなのかもしれないとも思っています。例えば「身体」という言葉と近い言葉で、日本語には「身（み）」という言葉があります。たぶん「身（み）」と「身体」は概念的にずれていて、AIについて考える場合にも、身（み）で考えたほうがいいのか、身体で考えたほうがいいのか、などというような議論もできるとは思います。そういうところも含めて、やはりいろいろ考えていかないといけないのかなとは思っています。

石田：AIというのは、まだ定義が決まっていないとお聞きしています。普段私が接しているAIはパソコンの中にしかありません。しかし、人工「知能」という言い方をしてしまうと、人型のロボットに魂のような知性を入れなくてはいけないといった、強迫観念がでてきてしまうのかなと思っています。また、先ほどの話に一点だけ補足させていただくと、ソフィアやアリスやナオは外国製のロボットですが、一応イランには神話から名前をとった自国製のアーラシュがあります。それを小児科病院で使っています。

小原：オンラインのお二人からご質問いただいていますので、短く要約して紹介させていただきます。まずお一人、東洋哲学研究所の蔦木さんからです。これは、師先生に対するご質問ということなのですけれども、二点あります。師弟関係の本質という観点からすると、宗教的指導者のAI化というのは、単なる冒涜という問題にとどまらず、より根本的な宗教体験の変質をもたらすのではないかということです。例えば以心伝心という言葉です。そういうものをどのように理解できるのかということが一点。それからもう一つは、これに関連すると思うのですが、宗教的な教えを伝えるAIと生身の師との関係性はどのように考えるべきかということです。師先生、よろしくお願いいたします。

師：ありがとうございます。どういう時間的なスパンで、どういう地域的なスパンで考えるかで、お答えが変わってくると思うのです。すごく狭く、今の私たちが師弟関係だと思っているものを師弟関係だというのであれば、確かに変容はあるでしょう。人間の師匠が人間の弟子に対して伝えるということは、例えばそこにAIが入ってくることで、影響が生じ、変わるということはあると思います。

ただ、先ほどの石田先生が紹介されていたように、イスラームだと普通にお墓の中にいる先人と話していました。仏教の中でも、例えば兜率天に行って話を聞いて帰ってきました、という例もあ

ります。そういう、いわゆる生きている人と人の師弟関係にとどまらない多様な師弟関係を踏まえるのであれば、今では失われてしまった、自分の周りにある「師匠」みたいなものとの関係や、そこから教えを受けるみたいなことが、実はAIで復活してしまうのもあり得るかもしれません。そして、それはある意味、本質的な変容といえると思います。ただ、今の私たちからすると本質的な変容なのかもしれないけれども、むしろ先祖返りしている部分もあるのかなとも思いますので、そこは捉え方や幅の取り方によるのかなという気もしています。

小原：もうお一人、オンラインから質問を紹介させていただきます。ミナディーさんからです。才脇先生が四〇年間ずっと振り返って、人間と機械の間にある壁というのは、基本的に変わっていないのではないかというようなご発言がありました。それに対して師先生のお話の中では、AIが人間のように見えてしまうことがあるというお話もあって、この二つの立場の違いはどこから来ると考えられるか、お考えをお聞かせいただければ幸いです、ということです。これについてまず才脇先生、お答えいただけますか。

才脇：先ほども師先生のお話と、実は車の両輪で矛盾していないと感じますと申し上げたところは、そのあたりにもありまして、実はつくっている立場から見ますと、システムや機械の限界性というのは、自分たちが大体把握しているものなのです。したがって、自分がこれってこんなもんだよな、ここまでは使えるけれども、これ以上はなと思っているものに対して愛情を注ぐ、神みたいに思ってしまうということは、なかなか難しいと思うのです。

しかし、それをぱっと出されて使うユーザーサイドから見た場合に、それが自分の感性に非常にぴったりとはまったり、あるいは自分の目的にうまく、あるいは自分の感覚的にすごく好きだったりすると、そこに感情移入していくのも、これも自然なことだと思うのです。したがって、技術屋さんは車にせよ、ペットロボットにせよ、自分たちが持てる技術を投入してつくって出していくわけですけれども、それを受け手側のほうがどういうふうに感じてくるかというのは、実は普遍的にあらゆるメディアであることかなと思うのです。漫画にせよ、アニメにせよ、映画にせよ、つくり手側の意図というのももちろんあるし、つくり手側が考えた問題の範囲というのもあると思うのですが、それが社会に出ることで受け手側のほうがまたそこにインスパイアされて、様々な自分なりのストーリー、解釈、物語をつくり上げていく。その中に、実は原作者やつくり手が考えていなかった問題点、トラブルになるような話などがあることもあります。よって、そういったところをどう解釈し、どう考えて社会として咀嚼していかないといけないかというのが、師先生のお立場ではないかなというような気がするのです。

そういう意味では、人間と機械の壁があると思っている僕というのは、あくまで僕個人の感情でして、つくり手側としては、まだ

まだだよなという思いがあるのですが、それをユーザーサイドのほうで、これ結構いいよねと思っていただけるのだったら、それはそれで嬉しいかな、ありがたいかなと思うのです。おそらくその間にある壁というよりかは、まだ解決していない問題、いろいろなパーフェクトではない部分というのが、その間にたくさん存在していると思うので、そのあたりをお互いの感じ方、考えがすれ違ったりするのが、それをお互いの正義を押し付け合うようなソーシャルメディア空間は、よくないなといったあたりかなという気がします。

師：才脇先生のお答えとほとんど同じなのですが、もう一つ付け加えるならば、やはり資本主義の中で、AIを使うことで儲かるようになってしまい、アテンションを取るのがすごく上手になってしまったというのが結構大きいなと思っています。これが儲からなかったら全然こんなことはないと思うので、資本主義は結構大きいかなと思っています。

小原：その点は、すごく大事だと思っています。才脇先生のお話では、四〇年前に開始されていた機械と人間との関係は、大きいところは変わっていない。ところが、それを取り巻く資本主義社会の環境は、四〇年前とは比べものにならないぐらいに変わってしまっていますので、そこから私たちが受ける影響というのは尋常ではないということです。全てのアテンションが誘導されたり、私たちの認知構造そのものに影響を与えるようになっていますので、このような点は過小評価せずに考えていく必要があると思います。

時間が迫ってきているのですが、あとお一人か二人ぐらい質問は受けられるかと思いますので、ご質問があれば挙手してください。

澤井：天理大学の澤井です。大変興味深いご講演を頂戴しました。ありがとうございました。いろいろと教えていただいて、その中で先ほども少し話題になりましたが、感覚ということなのです。宗教的な感覚というのは、果たしてロボットにインプットできるのかどうかというようなのが、やはりどうしても先ほどから議論になっているロボットと人間の関わり方の中で、最も重要なポイントなのではないかな。師から弟子への教えの伝達というか、信仰の伝達ということも同じようなポイントなのではないかなということです。つまり、良質な学習をロボットにさせるという、師先生もそういうふうにおっしゃったのですが、良質な学習の中に感覚的なものというのは、データとしてロボットに供給できるのかどうか。その辺の可能性というのを、少しお教えいただきたいなというふうに思います。

才脇：ありがとうございます。非常に本質的で重要な部分の問題かと思います。僕個人の見解なのですけれども、現在時点の技術では、そういった感覚というのをロボットに実装することは難しいというのが、正直な思いです。例えば、先ほどの高台寺のロボット一つ取りましても、動き自身、別にそういった宗教的考え方とは関係なく、プログラムでつくっているわけです。しかし、そこに人を感動させるようななめらかな動き、指の先の動き一つ取っても、できるかというと、そういったことすらまだ、今できない状況なのです。だから、こんなかくかくして動いていて、ここから何を読み取れというのだと言われたら、もうそんな感じなのです。だから受け手側のほうが、ここから何か意味を感じなくてはというのを一生懸命感じていただく場合には、そこの解釈していただくことも可能です。そういう意味では、さっきのペットロボットも全く同じなのです。ですけれども、本当の意味で客観的に人間が感じている様々な、そういった感覚、感性的なものをロボットに実装することができるかというと、今の技術はまだそこまではいたっていないというのが正直なところですし、そもそも感覚自体がどういうものなのか、頭の中でどういうふうに処理されて、我々に影響を与えているのかということすら、まだまだ研究課題の重要な難しい部分だと思いますので、将来の研究課題かなと感じてお

ります。

師：これはいろいろな視点があると思うのですが、私はロボットが宗教的な感覚を完璧に身に着ける必要は全くないと思っています。例えばチベット仏教などでは、明らかにブッダには見えない師匠であっても、弟子の側に「この人をブッダと見なさい」といった指示が出されることがあります。先ほどのELIZA効果ではないですけれども、つくりようによっては、ロボットのほうが適当に動いていたとしても、ユーザの側が宗教的な感覚を受け取ってしまう場合もあるのではないかと思っています。そういうことも、考えてもよいかとは思っています。

水野：関西大学の水野です。本日は非常に興味深い話をありがとうございました。私が質問したいのは、あるということではなくて、あるべきというのをAIの中に載せるというのは可能なのだろうか、どうなのだろうかということを質問させていただきたいということです。仏典、お経というのはお釈迦様が亡くなられてからだいぶ経ってからできて、その中には偽経といわれるものも含まれているということをうかがっております。しかし、その中でも正当性を持つものというのは、単にインドで生まれた、お釈迦様がしゃべったなどではなくて、何かしら本質をそこに継承している場合には、やはり仏教のお経ということで認めざるを得ないということがあると思うのです。要するにあるべきといいますか、これがあればそれはそれと認められるけれども、それは逆にそういうものがない場合には、たとえお釈迦様の言葉であっても、それを切り貼りしても、お釈迦様の言葉にはならないということはあると思うのです。

　そういう意味で、今日のご講演の中にあった慈悲という話が非常に面白いと思ったのですけれども、逆にそこに今度は暴力性が入る場合もあると思うのです。そうではなくて一つのあるべきという方向性を打ち出していくということはできるかもしれないけれども、しかしそれが本当にずっとあるべきという形で継承できるのか、修正できるのか、そもそも搭載できるのか。そのあたりの見立てを、できればおうかがいしたいと思うのですけれども、いかがでしょうか。

小原：なかなか難問だと思いますけれども。

師：今のお話は、仏教の伝統の中でいうと、何が仏説で何が仏説ではないかという議論になるかと思います。伝統的にいうと、「法性」つまり教えの本質にかなうものであれば、仏説とみなしてよいというような伝統が仏教の中にもあります。場合によっては暴力的な教えや、殺人を肯定するような教えについても、慈悲の発動であるならば否定はされない、というのも、仏教の中にはあります。

それをAIに載せることは可能なのかということなのですが、それが教えの本質にかなっているのかどうかを、誰が認定するかという問題が常に付きまとうかとは思います。AIは、仏典などの学習によって、ある種のパターンを見出すことができます。AIが見出したものを、仏教界の中で教えの本質にかなうものと認定することができるのか、という議論できると思います。AIが見出したものに教えの本質があるかどうかは判断すべきではない、あるいは、結果的にそこに教えの本質はあるかもしれないけれども、それに我々は依拠すべきではない、という考え方は、やはり一つの立場としてあると思います。結局のところ、AIが仏典の学習を通じてはじき出した、計算で導きだした何かを、仏教界がどのように評価するかという問題だと思います。これは誰も、たぶんまだ議論されていないので、これから議論していかなくてはいけないのだろうなとは思います。すみません、あまり答えになっていないです。

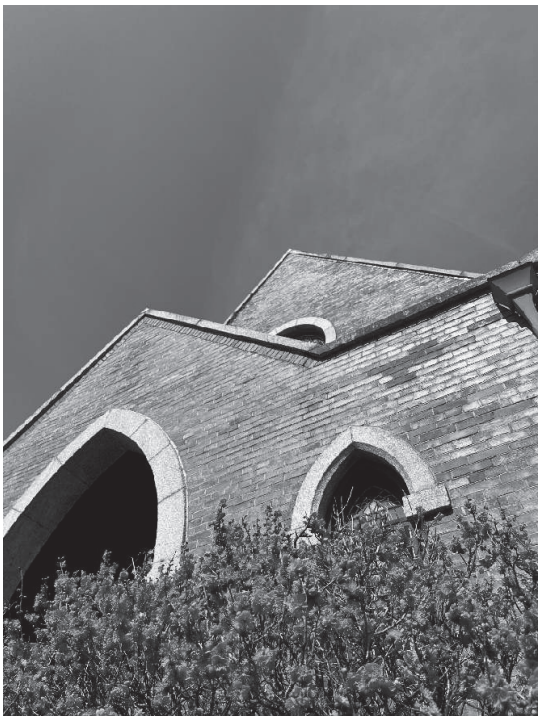
小原：今の質問をより一般的な文脈で、才脇先生にお答えいただきたいと思います。ChatGPTにしても、初期の頃は質問の仕方によっては、やはり差別的な答えを返してきたり、暴力的な返答などがあったと思うのですけれども、現在では問題のある内容については出力しないように、きちんとチューニングされています。ただ、あるべきものを実装できるかどうか。あるべきというのは人によっても文化的背景によってもかなり大きく異なってくるので、あるべきといった規範性をAIに学習させることが可能なのか、あるいは望ましいのか。そういった点を才脇先生にお答えいただければと思います。

才脇：ありがとうございます。ものすごく難しい本質的なお話だと思います。できるのかというと、技術的にはそういったルールを最後にかませるのかどうかという部分になりますので、できるとも言えます。しかし、できる範囲でできることというのが果たして、今ご質問されたような高次の話に対して、ご回答として適正かというと、それもどうかなという感じしますので、客観的に言えばできるともいえるけれども、対象によってはできないともいえるみたいなあたりが、落としどころになってしまうなと思うのです。奥歯にものが挟まるようなので申し訳ないのですが。

例えば、人を殺すようなことは言ってはいけません、民族差別はいけませんみたいな、誰が考えても一般的にそれは当たり前の客観的な事実でしょというような話に関しては、簡単にフィルター

をかけることができます。しかし、先ほどから出ているような、例えば仏教やあるいは神道などのいろいろなものの考え方、理論的なところなどの部分の本質に携わるところをAIそのものが今、学習しているかというと、実はそういったものも、あまり学習しているわけではありませんし、そういう微妙な判定ができるかというと、基本的にはイエス、ノーでフィルターかかっているだけなので、微妙なグレーのゾーンに対してきちんと回答できるかと、そんなことも全くありません。そういう意味でも発展途上の技術であるということが大前提かなと思います。

それと、やはりこれは欧米発の技術だなと思うのです。欧米のそういった新しいことをどんどんやって、ベンチャーつくってというような文脈でいきますと、多少パーフェクトでないものでも、それは利用者が判断するとして、利便性が高まって使えればいいよねみたいな、とにかくみんなに先に技術を出していくことで、優先的に押さえていこうみたいな発想が社会全体として是認されています。日本は、高度成長期などでも、ものすごく過剰品質といわれるぐらい、徹底的に問題点がないようにしてから社会に出すみたいなのがあったと思うのですが、そういうのとは全く違うつくりになっている。だから、セキュリティーの話などでも、少し知っている人間から見ると、もう危なくて仕方がないです。あっちにもこっちにも穴があるから、どう考えても個人情報もだだ洩れかもしれないなどと思うのです。しかし、一般的にそういうことは起こらないということが前提で、それでも利便性を追求しようみたいな話になっているところはたくさんあると思うのです。それがもうAIの、そういった今のお話に関しても共通して言える部分だと思いますので、欧米的なというのは、一つは理屈です。はじめに言葉ありきの文化です。そこで、言葉で何か理屈で判断していくという部分に関しては、そこそこ対応できるのではないか。しかし、言葉を超える部分を有している部分に関しては、相当疑問があるなという感じがいたします。すみません、こんなところで失礼します。



小原：予定の時間も過ぎましたので、そろそろ終了したいと思います。本日は「AI時代における宗教」ということで、その大きな枠の中で問うべき課題がたくさんあるということを確認できたのではないかと思います。私たちはすぐに答えに到達できなくても、どういう問いがあるのかということを認識するだけでも、まずは十分だと思います。そしてAIと宗教がどう向き合うかということだけではなくて、今日のような問いを通じて、そもそも師弟関係はどうであったのか、テキスト解釈はどうであったのかということを改めて振り返ることができるだけでも、非常に価値があるのではないかと思っています。つまり、AIのような存在がなければ、なんとなく当たり前で見過ごしてしまっているものがたくさんあると思いますが、その重要性を再認識するという意味でも、AIが伸張しているという文脈の中で宗教のあり方を考えるということは、非常に意義があるのではないかということを改めて思う時間となりました。

今日、ご講演およびコメントをいただいた先生方にお礼申し上げると共に、会場及びオンラインからも多数ご質問をいただきまして、非常に豊かな時間となりましたことを、改めて御礼申し上げます。それでは、これをもちまして本日のシンポジウム、終了とさせていただきます。どうも、ありがとうございました。